

石橋崇雄編

清朝『壇廟祭祀節次』訳注（一）
——凡諸祭祀・祈穀壇——

公益財団法人 東洋文庫

目

次

凡	解	序
例	題	
xxii	v	i

凡諸祭祀	2
------	---

一 祈穀壇	8
-------	---

樂章・簫譜・笛譜

1 迎神礼	8
-------	---

——祈平之章

2 奠玉帛礼	10
--------	----

——綏平之章

3 進俎礼	12
-------	----

——万平之章

4 初献礼	14
-------	----

——宝平之章

武生舞譜	16
------	----

5	重献礼	20
	—— 穰平之章		
	文生舞譜	22	
6	終献礼	26
	—— 瑞平之章		
	文生舞譜	28	
7	撤饌礼	32
	—— 渥平之章		
8	送神礼	34
	—— 滋平之章		
9	望燎礼	36
	—— 穀平之章		

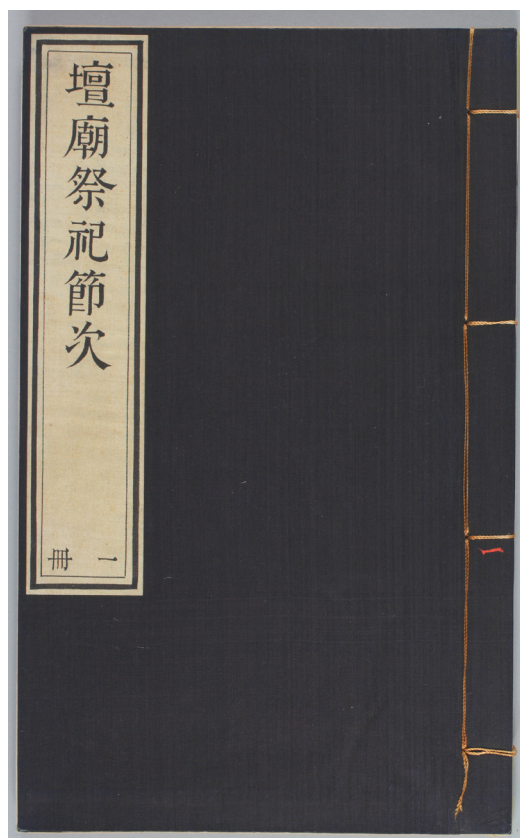


Fig. 2.『壇廟祭祀節次』 第一冊（表紙）



Fig. 1.『壇廟祭祀節次』 帙（表面）

序

公益財団法人「東洋文庫」(以下、東洋文庫と記す)は清朝の残した貴重な文献史料類を数多く収蔵・保存しているが、ここに取り上げる『壇廟祭祀節次』(以下、『節次』と略称することがある)もその一つである。標題には「壇」ならびに「廟」における各祭祀の「節次(『式次第』)」とあるが、清朝の京師ならびに各省に存在する「壇」ならびに「廟」における祭祀について総記したものではない。首都北京における国家祭祀のうち、あくまでも「大祀」と「中祀」に属すると定められていた「壇」・「廟」の祭祀に限って、その「節次」について詳細かつ具体的に伝えている記録である。

清朝すなわち大清国 (qīng dà qing guó) はこれまで、主として二つの面から言及されることが多かった。すなわち、明朝を継承する中国最後の¹伝統的専制王朝²(漢族社会に代表される農耕社会構造に立脚する中国的な王朝)としての面と、モンゴル帝国の大元ウルス(一般的にいう元朝)を継承する中国最後のいわゆる³征服王朝⁴(農耕社会と対置されるモンゴル社会に代表される遊牧社会構造に立脚する北アジア的な満洲部族連合王朝)としての面という二つである。しかしながら、清朝(大清国)の支配構造を検証しようとするならば、この二つの面に拠る視点だけではまだ不十分と言わざるを得ない。清朝(『大清国』、以下、清朝と記す)では、第六代高宗乾隆帝時代の一七五〇年代後半に最大版図を形成するが、その規模は中国内地のほかに、モンゴル高原、東トルキスタン、チベットなどを含むものであり、中国東北部で建国した満洲族が単に中国内地を支配したというだけの枠には収まらないからである⁵。

清朝はまさしく複合多民族国家と称するに相応しいものであり、その支配構造は、直接統治下においた「旗人支配者層」満(入関前の東北部における満洲・モンゴル・漢を主軸基盤とする民族連合で清ではこれを満と総称)ならびに「漢人被支配者層(中国内地)」と間接統治下においた「藩部被支配者層(モンゴル・チベット・ウイグル)」という「旗」満・「漢」・「藩」からなる三つの社会層に大別される。しかも、その「旗」満には満洲族としての統一を果たし新たな民族連合を実現した盛京(現、瀋陽)の政務所に座す「ハーン」を中心とする「八旗体制」という支配秩序の体系が、また「漢」には中国歴代王朝の伝統を継承する北京の政務所に座す「天子(皇帝)」を中心とする「天朝体制」という支配秩序の体系が、そして「藩」にはモンゴル帝国(とりわけ大元ウルス)における大ハーンの伝統を継承する承德の政務所に座す「大ハーン」を中心とする「北方遊牧君主体制」という支配秩序の体系が、それぞれ形成されていたことも見てとれるからである。

すなわち清朝では、一人の人物が「旗」満・「漢」・「藩」の各社会層にみられる三体制のそれぞれにおける宗主となり、「八旗体制」を統率する「ハーン」・「天朝体制」を支配する「皇帝」・「北方遊牧君主体制」を統轄する「大ハーン」を兼ねていたことになる。このことは取りも直さず、東ユーラシアの政治・経済・軍事・文化史上に大きな足跡を残す五族(満洲・漢・モンゴル・チベット・ウイグル)からなる複合多民族を共存させて統治する国家の宗主としての位置づけである。どれか一つの体制が他の二つを支配下に置くような体系ではなく、三つの体制が共存する重層構造の体系になっ

ていることから、これら三つの体制はそれぞれが独自の体制でありながらも、相互に影響を与え、かつ相互に影響を受けていたことが窺える。相互に影響を受けていたことについては、中国歴代王朝の伝統を継承する北京の政務所に座す「天子(皇帝)」を中心とする「天朝体制」という支配秩序の体系が形成されていた「漢」も例外ではなかったことから、清朝の首都北京においてもまた、中国古来の「華」の伝統文化とモンゴル帝国以降の「夷」の伝統文化が融合することになった。

ここに訳出して公刊する『壇廟祭祀節次』は、清朝の首都北京、すなわち「漢」にみられる「天朝体制」の中心であった北京における国家祭祀のうち、あくまでも「太祀」・「中祀」と称されていた「壇」・「廟」の祭祀に限って、その「節次」を詳細かつ具体的に伝えている。またそれゆえにこそ、清朝が単なる中国王朝としての位置づけにとどまるものではなく、五族が共存する複合多民族王朝として位置づけられる特色を如実に示す貴重な記録になっており、その特色は『節次』で採られている独特な記載方式をみれば顕著に窺うことができる。

五族(満洲・漢・モンゴル・チベット・ウイグル)を最大版図形成の主軸とする複合多民族国家であった清朝では、この五族がそれぞれ固有の言語を用いていたことを背景に、満洲・漢・モンゴル・チベット・ウイグルの各言語を共通語としての国語としてその政策に取り入れていた。なお、このなかの漢語もいわゆる「北京官話」であり、清代北京の内城地区にあった皇城内に設けられていた紫禁城や六部等の中央官庁で旗人官僚等が用いるための特別な共通言語として新たに満洲族が制定したものである。このように複数の国語を政務に活用していたなかで、とりわけ支配者層を形成して「満」と総称された「旗人」が入関前の東北部における満洲・モンゴル・

漢を主軸基盤としていたことから満洲語・漢語・モンゴル語を常用し、特に支配者層を象徴する国語とした。そのため、このなかの単一言語による記録が多いことはもちろんのこと、政務に関わる多くの記録類が満洲語・漢語・モンゴル語の複数をを用いて記す合璧方式で残されている。この場合、同じ一葉のなかに併記することもあれば、各言語版を別に作成することもあり、そのことは特に清朝の残した実録類に顕著である。

このように広く満洲語・漢語・モンゴル語を常用していた清朝の記録類のなかにあっても、『壇廟祭祀節次』の記載方法は他に類例のない特異な方式を用いている。清朝における合璧方式の場合、各言語による記載を対比してみると相互に内容の相違があることはしばしばあるものの、その各言語による文章としては文頭から文末まで同じ言語で統一されて記されているのが通常である。ところが『節次』に限っては、そのような記載方式になっていない。満洲文と漢文とを混用する記載方式なのである。壇や廟ごとに実施する祭祀の具体的な進行内容は満洲文のみで記すとともに、その実施する祭祀の標題、楽奏の章題・章文、楽章の鐘譜・簫譜・笛譜・舞図の舞形指示は漢文のみで記し、満洲文と漢文とのそれぞれによる全く異なる記載内容を次々と連結・連動させ、祭祀節次として全体が完結するように一纏まりの流れとして総記する満漢混用の記載方式を採っている。しかも本来は左から右に改行する満洲文が、ここでは漢文の改行にあわせて右から左に改行する変則的な記載になっている。したがって、満洲文あるいは漢文のどちらかによる記載だけではその祭祀の節次が完結しないだけでなく、記録としても成立しえないという特異な文献史料なのである。

華夷の別を伴う中国伝統の中華思想に倣うならば、華を象徴する漢字と夷を象徴する満洲文字とが一体となって完結し、成立する祭祀節次の記録

なのである。これはまさしく「華」の徳を備えて天意を受けた特別な「夷」が天子として天下を治める清朝における「華夷一家」の支配構造（清朝の在り方としてはむしろ「夷華一家」を具現化した記載方式である。しかも『壇廟祭祀節次』が、清朝の首都北京、すなわち「漢」にみられる「天朝体制」の中心であった北京における国家祭祀のうち、あくまでも「大祀」と「中祀」に属する「壇」・「廟」の祭祀に限って、その「節次」を詳細かつ具体的に伝えているからこそ、清朝が単なる中国歴代王朝の伝統に連なる王朝だけにはとどまらず、一人の人物が「旗」・「漢」・「藩」の各社会層にみられる三体制のそれぞれにおける宗主となり、「八旗体制」を統轄する「ハン」・「天朝体制」を支配する「皇帝」・「北方遊牧君主体制」を統轄する「大ハーン」を兼ねていたことを如実に示す記録になっている。

さらに特筆すべきは、すでに少し触れたように『壇廟祭祀節次』には樂章の鐘譜・簫譜・笛譜・舞図の舞形指示が明記されている。しかも、『節次』は全体に亘って多色を施す手法による彩色鈔本になっており、なかでも、壇・廟の各祭祀における「舞」を担当する「舞生」等の「舞譜」（これだけ単色）とともに、その「舞」における着衣・帽子・持ち物等をカラー図版で示した「祭祀穿戴手執」を別冊にして収めていることである。これまでも『大清会典』・『大清会典事例』・『欽定太常寺則例』・『欽定大清通礼』・『欽定礼部则令』等によって、壇・廟の各祭祀における「節次」の概要と「楽章」、それに関係者の官名や服装や舞の名称までは知ることができた。しかし、その「楽章」の旋律、祭祀における各担当官の「唱」の具体的内容、それに「舞生」等の着衣・帽子・持ち物の色彩、また「舞生」等による舞の実態などは未詳のままであった。東洋文庫所蔵の『壇廟祭祀節次』はこれまで知り得なかったこうした点に関わる情報を克明かつ詳細に伝える稀

有な記録なのである。

最後に『壇廟祭祀節次』が官撰記録で、清朝で作成された編纂史料であることに触れておきたい。改めて言うまでもなく、檔案史料と編纂史料とはその史料としての性格を全く異にする。なにか制度の内容を知ろうとするとき、一般に「建て前」が解るのは編纂史料であり、「実態」が解るのは檔案史料である、とされている。そのため、清朝史研究では広く一般に檔案史料類の活用が重要視される現状にある。別段このことに異を唱えるつもりはない。ただ、檔案史料類よりも「実態」が具体的に解る編纂史料類も存在しており、『壇廟祭祀節次』はその典型的な事例の一つである。他に類例のない様々な特異な情報を整理して総括する貴重な記録になっているのは編纂史料であるからこその特徴と言えよう。

本来ならば、『節次』の全体をここに訳出して示すべきであるが、紙幅の関係から、先ずは第一冊に収録されている「凡諸祭祀」と「祈穀壇」から始めて、順次、公刊することにした。

出版するにあたり、（公財）東洋文庫研究部の中村威也氏には、史料の画像の転載・印刷の対応をはじめ、紙面の設計・配置、画像の選択や校正など全体の内容・構成に至るまで、編集のすべてにわたって多大な協力を得た。ここに特に付記して謝意を表したい。

注

- 石橋丑雄『北平の薩滿教に就て』外務省文化事業部、一九三四年
- 『天壇』山本書店、一九五七年
- 石橋崇雄「八色別との成立時期について——清朝八旗制度研究の一環として——」『中国近代史研究』三、一〇四〇頁、一九八三年
- 「清初八旗制下における職官名の漢字表記改称時期——特に *hayan* 及び *gobshiyun* 関係の職官名を中心として——」『中国近代史研究』六、二一〇頁、一九八八年
- 「清初ハン(han)権の形成過程」『榎博士頌寿記念東洋史論叢』二一〇四二頁、汲古書院、一九八八年
- 「清初皇帝権の形成過程——特に『丙子年四月〈秘録〉登ハン大位檔』にみえる太宗ホン・タイジの皇帝即位記事を中心として——」『東洋史研究』五三一、九八〇一三五頁、京都大学、一九九四年
- 「清初祭天儀礼考——特に『丙子年四月〈秘録〉登ハン大位檔』における太宗ホン・タイジの皇帝即位記録にみえる祭天記事を中心として——」石橋秀雄編『清代中国の諸問題』五七〇九二頁、山川出版社、一九九五年
- 「マンジュ(*manju*, 満洲)王朝論——清朝国家論序説」『明清時代史の基本問題』二八五〇三二八頁、汲古書院、一九九七年
- 「清朝の支配権と典礼——特に清初前期におけるハン権・皇帝権と即位儀礼・祭天典礼の問題を中心として——」『王権のコスモロジー』二〇六〇二三二頁、弘文堂、一九九八年
- 「清朝国家論」『岩波講座世界歴史二三』一七三〇一九二頁、岩波書店、一九九八年
- 「多民族国家清朝をめぐる——歴史上の位置付け・時代区分・支配構造・正統性の問題を中心として——」『世界史の研究』一七九、一〇一〇頁、山川出版社、一九九九年
- 「大清帝国への道」講談社学術文庫、二〇一一年
- 「雍正帝『御製朋党論』研究〈序説〉——大清国支配構造分析試論の一環として——」『高橋継男教授古稀記念東洋大学東洋史論集』四七九〇五〇二頁、汲古書院、二〇一六年
- 石橋秀雄『征服王朝清をめぐる』『世界史の研究』五四、一九六八年
- 「大元・大明・大清朝と五族の中国」『世界史の研究』六三、一九七〇年
- 「清朝史再考——明末清初と五族の中国」清朝史研究刊行会、一九八九年
- 「清代史研究」緑蔭書房、一九八九年
- 「清初のハン」太祖から太宗」『世界史の研究』一五五、一九九三年
- 編『清代中国の諸問題』山川出版社、一九九五年

解題

一

東洋文庫所蔵の『壇廟祭祀節次』（請求記号：神正133）は一帙（全函・全六冊）の装丁で、その帙には絹地に多色織りの刺繍文様が施されている（口絵Fig.1参照）。

各冊の集録内容（第一冊～第三冊は、擡頭部分に記載されている壇廟名・祭祀名を挙げ、記載順を数字で記した。第四冊は、原図の題名を、第五冊と第六冊は、題簽をそれぞれ記している）は以下の通りである。

第一冊「壇廟祭祀節次」（全57葉）

凡諸祭祀（訳注者による命名）

1. 析穀壇
2. 園丘壇
3. 園丘壇常雩礼
4. 園丘壇大雩礼
5. 方沢壇

第二冊「壇廟祭祀節次」（全54葉）

6. 太廟時享
7. 太廟祫祭
8. 奉先殿
9. 社稷壇春祭
10. 社稷壇秋祭

第三冊「壇廟祭祀節次」（全58葉）

11. 社稷壇祈雨
12. 社稷壇報祀
13. 朝日壇
14. 夕月壇
15. 文廟春祭
16. 文廟秋祭
17. 先農壇
18. 先蚕壇
19. 帝王廟春祭
20. 帝王廟秋祭
21. 太歳壇
22. 太歳壇祈雨
23. 天神壇祈雨
24. 地祇壇祈雨

第四冊「祭祀穿戴手執」（全15葉）

- 武舞生帽
- 武舞生衣（2. 3. 23.）
- 文舞生衣（2. 3. 23.）
- 武舞生衣（5. 24.）

文舞生衣(5. 24.)

武舞生衣(1. 6. 7. 8. 9. 12. 13. 17. 19. 20. 21. 22.)

文舞生衣(1. 6. 7. 8. 9. 12. 13. 15. 16. 17. 19. 20. 21. 22.)

武舞生衣(14.)

文舞生衣(14.)

唱禾詞採桑歌人所戴之暖涼帽帶(17. 18.)

唱禾詞採桑歌人所穿之五色衣(17. 18.)

唱禾詞採桑歌時執旗人所戴之帽帶(17. 18.)

唱禾詞採桑歌時執旗人所穿之衣(17. 18.)

唱禾詞採桑歌時所戴之五色旗(17. 18.)

凡祭祀東西領文生武生班之人所執之節

武舞生所執之干戚

文舞生所執之籥羽

青衣童子帽帶(4.)

青衣童子衣(4.)

大雩礼領青衣童子之班人所執之節(4.)

青衣童子所執之羽(4.)

第五冊「文生武生舞譜」(全49葉)

第六冊「青衣童子舞譜」(全35葉)

これを踏まえ、序で略述した『壇廟祭祀節次』の特徴について今少し掘り下げて整理することから始めたい。

第一は、『節次』に記録されている「壇廟」のことである。第一冊から第三冊に採録されている「壇廟」の祭祀は、光緒二十五年刻本『欽定大清会典』卷三十五「礼部」「祭祀清吏司」一に、

○凡大祀、冬至、祀皇天上帝於圜丘。²夏日至、祀皇地祇於方泽。⁵列聖配、各以天神・地祇從焉。²³常雩亦如之。²⁴孟春、祀皇天上帝於祈年殿、以祈穀。¹奉列聖配、而不設從祀。時之孟月、時饗於太廟。⁶歲除則大禴。⁷皆以功王功臣配饗。仲春仲秋上戊、祀太社太稷、配以后土句龍氏・句饌氏、以祈報。¹⁷○凡中祀、春分以朝日、¹³秋分以夕月。¹⁴季春吉亥、饗先農。¹⁵吉巳、饗先蚕。¹⁸春秋仲月諏吉、祭前代帝王、以名臣配。上丁・釈奠於先師孔子、以先賢先儒配焉。¹⁶秋仲月諏吉、祭閔帝文昌、如前代帝王而無配。歲祀其誕、迎歲送歲則祭太歲。²¹○凡羣祀、曰羣廟、曰羣祠。

とあるように、清朝における「大祀」と「中祀」に限られている(傍線・数字は訳注者。数字は『節次』一―三のものと同じ)。このことは、『壇廟祭祀節次』が、「皇帝親詣行礼」を原則とする祭祀をはじめ、天朝を自称する清朝における国家祭祀として重要な意味を持つと位置付けられている壇廟に限って、その祭祀節次を詳細に纏めた記録であることを示しており、国家祭祀の視点から清朝の位置付けを検証する上で重要である。

第二として、第一冊から第三冊の「壇廟祭祀節次」における記載方式のことがある。これが満洲文と漢文とを混用する記載方式であることは既に述べた。すなわち、壇や廟ごとに実施する祭祀の具体的な進行内容は満洲文のみで記すとともに、その実施する祭祀の標題、儀礼の名称、楽奏の章題・歌詞、楽章の鐘譜・簫譜・笛譜・舞図の舞形指示は漢文のみで記し、満洲文と漢文とのそれぞれによる全く異なる記載内容を次々と連結・連動させ、祭祀節次として全体が完結するように総記する満漢混用の特異な方式になっていることである。この場合、

dotolobune hahan enduri be okto sene hūlambi, (105a 7~8、本書8頁)

（典儀官が「神をお迎えたまえ」と唱す。）

とある（ただし、記載は右から左に改行する変則的方式）ように、各祭祀における典儀官（*dorobure hatan*）などの各担当官の名称が満洲語であったこと、そしてまた各担当官による「唱」の語句が、「*enduri be okdo*（神をお迎えたまえ）」のように全て満洲語によるものであったことを具体的内容として明白に伝えていることは重要である。さらにまた、「楽章」に旋律を示す音符表記文字が付記されていることのほか、その「楽章」の歌詞一語ごとの舞形がどのように繋がっていくのかを詳細に記していることは他に類例がなく、特筆すべき特徴である。また、満洲文と楽奏の章題・歌詞の漢文は黒字であるが、祭祀の標題、儀礼の名称、楽章の鐘譜・簫譜・笛譜・舞図の舞形指示についてはそれぞれを色分けする方式で彩色を施す手法になっていることも大きな特徴となっている。

第三には、第四冊に収められている「祭祀穿戴手執」のことがある。そこには、壇・廟の祭祀ごとに参加する「文舞生」・「武舞生」・「青衣童子」の着衣・帽子・持ち物の形状・文様・色彩について、手書きの彩色画で克明に記録されているからである。しかも東洋文庫における収蔵当初からの保存状態が非常によかったことにより、破れや剥がれ等による欠損や色褪せ等が全くなく、作成当時そのままであるかのように鮮やかな彩色を今に伝えている。こうした実に稀有な記録を目の当たりにできることは、まさしく驚嘆にあたいする。第四冊の「祭祀穿戴手執」が手書きの彩色画であることは、第一冊から第三冊にかけて記録されている「壇廟祭祀節次」が多色を施す記載法になっていることや、帙の装丁が絹地に多色織りの刺繍文様を施していることと併せ、『節次』が宮中における特別な意味をもつて作製されたことを窺わせるに充分である。

そして第四としては、第五冊の「文生武生舞譜」と第六冊の「青衣童子舞譜」のことがある。ここには「文舞生」・「武舞生」・「青衣童子」による舞について、型の名称と型の画との総てが克明に記載されている。四「祭祀穿戴手執」・五「文生武生舞譜」・六「青衣童子舞譜」を掲げ所に、各壇・廟におけるそれぞれの祭祀ごとに、その「節次」の記載に従って「楽章」と「舞譜」を読解して組み立てていけば、清朝における「大祀」・「中祀」の「壇」・「廟」の祭祀で行われた「舞生」の舞が連動色彩画面で舞い始めることになる。

これまでも『大清会典』・『大清会典事例』・『欽定太常寺則例』・『欽定大清通礼』・『欽定礼部则令』等によって、壇・廟の各祭祀における「節次」の概要と「楽章」、それに関係者の官名や服装や舞の名称までは知ることができた。実際、天壇については『大清会典事例』ならびに『欽定太常寺即例』の記載を検証して「析穀壇」祭祀の実態に迫ろうとした石橋丑雄『天壇』（山本書店、一九五七年）等の先行研究もある。

しかし、その「楽章」の旋律、祭祀における各担当官の「唱」の具体的内容、それに「文舞生」・「武舞生」・「青衣童子」の着衣・帽子・持ち物の色彩、また「文舞生」・「武舞生」・「青衣童子」による舞形の実態などは未詳のままであった。東洋文庫所蔵「壇廟祭祀節次」は、これまで殆ど知り得なかった事柄に関わる情報を克明かつ詳細に記録して今に伝えている点において、まことに貴重で稀有な記録なのである。

『壇廟祭祀節次』を解説し検証することは、単に清朝における国家祭祀としての壇廟祭祀の実態を解明できるだけにとどまらず、広く中国史における祭祀研究にも大きく裨益できるものと考えている。

ところで、『壇廟祭祀節次』は清朝におけるどの時代に作成されたので

あろうか。次にはこのことに移りたい。

二

第一冊の冒頭に満漢合璧による「凡諸祭祀」が収められている。惜しいことにそこに記年はなく、直ちに作成年代を特定することができない。ただ、この「凡諸祭祀」にみえる特定の職・官名に対する満洲語表記を検証することで、そこから大凡の作成年代については推定することができる。その検証作業の詳細は別に用意している研究篇に譲ることにして、「凡諸祭祀」には例えば(以下、原則としてローマ字表記はメーレンドルフ方式による満洲語を示した。本書「凡例」4. [p.xiii] 参照)・

jwwe kumnda meimcni doroi/ mahala, doroi cuku, sabirgi kurume, solin
gūlla cutu, erile monggoli, jaksu/ jafafi, dogonde coolai maksin i kumusi
sebe gafi, maksire ba i hashū ič/ ergide faidame ilifi, kobolome gungeme
alyambi, (04a 5 ~ 2)

司楽官二員、各戴朝帽、穿朝服補褂皂靴、帶数珠、執節、預引武舞生
等就位左右立、肅恭祇候。(01a 2 ~ 5)

(二人の司楽官はそれぞれ朝帽・朝服・補褂・皂靴を身に着け、数珠を首に掛け、
節を手に持ち、予め武舞生らを連れて行つて、舞う位置の左翼と右翼に並び
立たせ、肅々と敬虔な想いで(開始の時を)待つ)
とあるほか、

gehi jwwe kumnda meimcni doroi/ mahala, doroi cuku, sabirgi kurume, solin
gūlla cutu, erile monggoli, jaksu/ jafafi, bihei maksin i kumusi sebe gafi,
ibefi maksire ba i hashū ič/ ergide faidame ilime jabdufi, sirame dorolome
doboro kumun deribumbi, (01a 2 ~ 5)

又司楽官二員、各戴朝帽、穿朝服補褂皂靴、帶数珠、執節、引文舞生
等上就位左右立、然後亜献楽奏。(01b 6 ~ 02a 4)

(再び二人の司楽官はそれぞれ朝帽・朝服・補褂・皂靴を身に着け、数珠を首
に掛け、節を手に持ち、文舞生らを引き連れて進み、舞う位置の左翼と右翼
に並び立たせると、亜献の楽が始まる)

とあるなど、「kumnda 司楽官」が常に、「大祀」・「中祀」と称される「壇」・
「廟」の祭祀実施に際し、その儀礼進行における要の役を果たし、「coolai
maksin i kumusi 武舞生」や「bihei maksin i kumusi 文舞生」らを引率する等
の式次第が記されている。

この「kumnda 司楽官」ならびに「kumusi 舞生」における満洲語表記の
「kumnda」と「kumusi」について、清初から作成された私撰・官撰の満洲
語辞典類を見しつてその初出を検証してみると、『han i arala nonggine
toktobuha manju gisun i buleku bihe, 御製增訂清文鑑』巻四『hala sindara
šošolon, 設官部』二『ambasa hafasai hacin, 臣宰類』第八に、

kumnda, 司楽 kumun i baita be dara niyalma be, kumnda sembi.

(楽の事務について掌握する者を、司楽 kumnda といふ)

kumusi, 楽舞生 kumun deribure de kalka delhe jafafi maksire niyalma be,
kumusi sembi.

(楽を始める際に干戚・籥羽を手にして舞う者を、楽舞生 kumusi といふ)
とあり、これが初出であるとの結果に辿り着く。

この「kumnda 司楽官」と「kumusi 舞生」が首都北京で実施される「大祀」・
「中祀」と称される国家祭祀としての「壇」・「廟」祭祀に深く関わる職・
官であることは、そしてその満洲語表記の「kumnda」と「kumusi」の初出
が『han i arala nonggine toktobuha manju gisun i buleku bihe, 御製增訂清文鑑』

であることについては、『壇廟祭祀節次』の作成年代を推定できることはもちろん、それと同時にその作成に関わる清朝の政治背景を窺い知ることができるという意味でも重要視されなければならない。

このことに鑑み、*manju gisun i buleku bihe*、清文鑑」の名称が付されている辞典類作成の変遷ならびにその変遷と密接に展開された清朝支配構造の変遷について整理しておきたい。

三

清朝で「*manju gisun i buleku bihe*、清文鑑」の名称を付した国語辞典類を御製すなわち皇帝の命によって編纂・刊行することが始まったのは康熙年間の後期から末期にかけてのことであり、ちょうど康熙帝が中国内地を平定した時期、あるいは西モンゴルのオイラト諸部を統一して清に対抗するジュンガル部族長ガルタンに勝利した時期から程なくの期間に符合する。

この点に注目してその後における「*manju gisun i buleku bihe*、清文鑑」の名称を付した辞典類の編纂・刊行の変遷を辿ると、国語辞典類としては当然のことながら清朝における支配構造の変遷と密接に連動しており、清朝における支配構造拡大の反映として実施された諸政策の一環であったことに気付かされる。

清朝では複合多民族国家としての版図が拡大していくなか、その国家構造の変化を背景に旗人支配者層を対象とする独自の科擧として繙訳科擧を*実施した。

版図の拡大につれて独自の言語や文字をもつ民族を内包する支配構造が

進んだことで、その統治に際して多言語相互における繙訳（翻訳）作業の重要性が増大していったからである。清朝では公文書を作成する際に必要となる繙訳作業のためにさまざまな専門繙訳機関を設置し、*bihez*（筆帖式）と呼称される特異な繙訳官も任用された。この *bihez* 任用に関わる制度の一環として開始されたのが繙訳科擧であった。そのため、版図拡大によって変化する支配構造の実情に合わせて繙訳科擧制度の施行改訂が幾度となく繰り返されるなか、当然のこととして繙訳科擧に際して備えなければならない書物の数が増大していく。その必要不可欠とされた書物の一つに「*manju gisun i buleku bihe*、清文鑑」の名称を付した辞典類があった。

咸豊二（一八五二）年に刊行された『欽定科場条例』巻五十九「翻訳・翻譯郷会試上・例案に収められている嘉慶十二（一八〇五）年の奏定をみると、翻訳・考試、応將場内、応用各項清書、開單移咨武英殿、各刷印一部、移送札部存庫備用。計咨取古文淵鑑一部、五經一部、四書一部、性理精義一部、清文鑑一部、資治通鑑一部、六部成語一部、孝經衍義一部、清文補彙一部、清文彙書一部、俱須清漢合璧。

とあり、また同じく嘉慶十五年の上諭には、

於翻譯・考試預備考官檢查之處、尚恐未能周備。謹遵旨詳細酌擬、翻譯・應用清漢字書籍十五種、及札部現存書目分繕清單、恭呈御覽、伏候命下行文武英殿。（中略）計頒發順天府、聖諭廣訓清漢各一部、日講易經清漢各一部、日講書經清漢各一部、日講春秋清漢各一部、日講四書清漢各一部、清漢合璧五經各一部、清漢合璧四書各一部、孝經清漢各一部、性理精義清漢各一部、小学清漢各一部、通鑑綱目清漢各一部、

* 石橋崇雄「清朝の「繙訳科擧」をめぐって」『世界史の研究』一三五、一七一―一七頁、

古文淵鑑清漢各一部、四体清文鑑一部、增訂清文鑑一部、蒙古清文鑑一部。又補發札部、聖諭廣訓、日講易經、日講書經、日講春秋、日講四書、性理精義、通鑑綱目、古文淵鑑、清漢各一部、增訂清文鑑一部。とある。いずれも「manju gisun i buleku bihe, 清文鑑」の名称を付した辞典類が翻訳科挙と深く関わっていたことを示しているが、同時に嘉慶年間では各種の「manju gisun i buleku bihe, 清文鑑」を備えていなければならなかったことも知れる。

そこで「manju gisun i buleku bihe, 清文鑑」の名称が付された国語辞典類を、「御製」の表記の有無にとらわれることなく、その刊行順に列記すると次の①～⑩のようになる。^{**}

①康熙四十七（一七〇八）年御製序

『han i araha manju gisun i buleku bihe,』康熙四十七年刊
「manju gisun i buleku bihe,」の名称が付してある辞書として最初のもので、満洲語の語彙を満洲語で解釈した辞典である。なお、『han i araha manju gisun i buleku bihe,（皇帝を兼ねる）ハンが作成した満洲語の（辞）典（とらう）書』は後世、『御製清文鑑』の名称で広く知られることになるが、作成された当初は満洲語による表題のみで漢字表記は付されていない。清朝では順治元（一六四四）年に入関する以前の段階から中国古典類を満洲語に訳出する作業を開始しているが、この『han i araha manju gisun i buleku bihe,』では、収録した見出し語彙の解釈に際し、その語彙解釈に関連する事例が既に作成されていた満洲語版の経書や実録等に見える場合には、その事例をそれぞれの語彙解釈の後に付記している。これはこの『han i araha manju gisun i buleku bihe,』だけの大きな特徴であり、これ以降に作成された同種

の辞典類には全くみることができない。

②康熙五十六（一七二七）年御製序

『han i araha manju gisun i buleku bihe,』康熙五十六年刊
満洲語による表題は①と同一であるが、モンゴル語による直訳が併記されていることから、後に『御製満洲蒙古合璧清文鑑』あるいは『御製滿蒙合璧清文鑑』、さらには『御製蒙古清文鑑』あるいは『蒙古清文鑑』と通称されることになるが、作成された当初に漢字表記が付されていないのは①と同様である。満洲語とモンゴル語を併記する標題の形式からも窺えるように、①の収録語彙にモンゴル語による直訳を併記した満洲語とモンゴル語との対訳辞典で、①の語彙解釈もモンゴル語による直訳を併記して継承されているが、①の語彙解釈の後に付記されていた経書や実録等に見える事例は省かれている。

③雍正十三（一七三三）年序

『nikan hergen i ubalyambuha manju gisun i buleku bihe, 音漢清文鑑』
刊行年未詳
「nikan hergen i ubalyambuha manju gisun i buleku bihe, 漢字で繙訳した満洲語の（辞）典（という）書」の満洲語表記に「音漢清文鑑」の漢字表記が併記された満漢合璧の表題になっている。御製ではなく、著者は durgaiya bala 董佳氏の mingdo 明鐸である。①の各主題項目に収録されている満洲語の見出し語彙を漢字の語彙に直訳した満漢対訳の語彙対比辞典であるが、①と②にみられた語彙解釈は付されていない。

④乾隆八（一七四三）年御製序

『han i araha manju monggo gisun i buleku bihe,』乾隆八年刊
満洲語による表題をみると①と②の表題における「manju gisun i 満洲語の」

の「manju」の後に「momngo モンゴル」が加筆されており、後に『御製満蒙文鑑』あるいは『御製満洲蒙古合璧清文鑑』と通称されるようになるが、①や②の場合と同じく作成の当初に漢字表記は付されていない。満洲語の語彙解釈にモンゴル語を併記した②との相違は、②で満洲語に併記されているモンゴル語表記を全て満洲語表記に置き換えた点にあり、記載形式の修訂に主眼をおいたもので、内容としては②をそのまま継承した辞典になっている。

⑤乾隆十一（一七四六）年序

『emu be tacifi ilan be hafukiyara manju gisun i buleku bithe, 一学三貫清文鑑』
刊行年未詳

「emu be tacifi ilan be hafukiyara manju gisun i buleku bithe, 一を学三貫清文鑑」を洞察することになる満洲語の（辞典（という）書）の満洲語表記に「一学三貫清文鑑」の漢字表記を併記した満漢合璧の表題になっており、『論語』の「季氏」篇にみえる陳亢の言である「問一得三」に通じる趣旨を表している。著者は宗室の jumu 屯図で、③の場合と同じく御製ではない。満漢合璧で収録する各項目の配列は①をそのまま踏襲しているが、満洲語の語句に漢字語句を単に対比して列記するという形式のものではない。その表題に明示されているように、①における語句解釈について問答形式で詳述した独特な内容の辞典である。詳細は別稿に譲るとしてその一例を示しておく、第一巻の「abkai hacin, 天文類」について、

* * Fuchs, Walter, Beiträge zur Mandjurischen Bibliographie und Literatur. TOKYO, 1986. 今春秋「清文鑑・単体から五体まで」『朝鮮学報』第三九・四〇輯、朝鮮学会、一二一～一六三頁、一九六六年。石橋崇雄「Man i araha manju gisun i buleku

bi kemuni baita aku sula bisire ucun, gucusi emgi niyalma ojoro doro be leolome henduhengge, muse jabšan de enduringge gengiyen i forgon de banjijila be dahame, abkai fejerg i baita gıyan be gemu saci acambi, sala nanggi, teni dergi abkai elbehe gosin, ejen i hūwāsibula kesi, ama ene i ujile baiti be ugderakū onibi sehe bithe, (漢文の原文は省略)

（私がこれまで常に政務のはざまで時間の空いている折に、朋友らと一緒にあって人としてあるべき道理について議論し語り合ってきたこととしては、「私どもは幸運にも聖明な時世に生まれ育ったからこそ、天下の事理について皆が俱に判るべきである。判ったならば、そこではじめて上天が（私どもを）庇護してきた仁愛、君主が（私どもを）養成してきた福恩、父母が（私どもを）養ってきた温情に背かないようにすることができると話してきたのであった。）

とあるような具合で、その主旨の殆どが中国伝統の儒教における経典の解釈に通じる内容になっており、「清文鑑」の名称が付してある辞書のなかでひとときわ異彩を放っている。

⑥乾隆三十六（一七七二）年御製序

『Man i araha nonggime tokobuha manju gisun i buleku bithe, 御製増訂清文鑑』
乾隆三十八（一七七三）年刊

御製の「清文鑑」としては初めてその作成時から漢字による表題が付され、『Man i araha nonggime tokobuha manju gisun i buleku bithe, (皇帝を兼ねる) ハンが作成した、(収録語彙を) 増加し確定した満洲語の（辞）典（という）書』

bithe, (御製清文鑑)』考』『国士館大学文学部人文学会紀要』別冊第一号、国士館大学文学部、一九八九年。栗林均「モンゴル語資料としての『清文鑑』」『東北アジア研究』一二、東北大学東北アジア研究センター、一三四頁、二〇〇八年。

の満洲語表記に、これを直訳した「御製増訂清文鑑」の漢字表記を併記した満漢合璧の表題になっている。その表題が示すように、①に収録されている見出し語彙を大幅に修訂増補した辞典で、①の見出し語彙と同じ場合には①の語彙解釈を継承しているが、①にみえる語彙解釈に付記した出典説明の部分については全て削除している。また満洲語の見出し語彙のそれぞれに対して初めて適合する漢語を新たに併記したほか、その見出し語彙における満洲語の音は三合切音(母音と子音を最大三文字による漢字の組み合わせで原語の音を示す方式)の漢字で、また漢語の音は満洲文字で示しており、満漢対訳の国語辞典としてはその実用性が格段に増している。

⑦ 乾隆四十五(一七八〇)年御製序

『han i araha manju monggo nikan hergen ilan hacin i mudan acaba buleku bihe, 御製滿殊蒙古漢字三合切音清文鑑』 乾隆五十七(一七九二)年刊

『han i araha manju monggo nikan hergen ilan hacin i mudan acaba buleku bihe, (皇帝を兼ねる)ハンが作成した満洲(文字)・モンゴル(文字)・漢字(の)三種類の音を併せ(記し)た(辞)典(という)書』の満洲語表記に「御製滿殊蒙古漢字三合切音清文鑑」の漢字表記が併記された満漢合璧の表題になっている。その表題が示すように、満洲語による見出し語彙に適合するモンゴル語と漢語を併記したうえで、満洲語には三合切音方式の漢字・モンゴル文字・適合する漢字による音を、モンゴル語には三合切音方式の漢字・満洲文字・適合する漢字による音を、漢語には満洲文字・モンゴル文字による音をそれぞれ記しており、満洲語・モンゴル語・漢語の三言語をめぐると対比発音表記辞典になっている。

⑧ 『manju monggo nikan gisun i kamcihula buleku bihe, 滿洲蒙古兼漢清文鑑』

(刊行年未詳)

『manju monggo nikan gisun i kamcihula buleku bihe, 滿洲(語)・モンゴル(語)・漢語を合致させた(辞)典(という)書』の満洲語表記に「滿洲蒙古兼漢清文鑑」の漢字表記が併記された満漢合璧の表題になっている。その表題が示すように、満洲語による見出し語彙に対してそれに適合するモンゴル語と漢語の語彙を併記した三語対照辞典で、語彙解釈はない。刊行年は未詳であるが、Walter Fuchs氏によって乾隆年間に作成されたものと考えられている。

⑨ 『han i araha diin hacin i hergen kamciha manju gisun i buleku bihe, 御製四体清文鑑』

(刊行年未詳、乾隆四十七年以降説あり)

『han i araha diin hacin i hergen kamciha manju gisun i buleku bihe, (皇帝を兼ねる)ハンが作成した四種類の文字が合致した満洲語の(辞)典(という)書』の満洲語表記に「御製四体清文鑑」の漢字表記が併記された満漢合璧の表題になっている。その表題が示すように、満洲語による見出し語彙に対してそれに適合するチベット語・モンゴル語・漢語を対比して一行に列記した四言語の対訳辞典である。なお⑥や⑦にみられた各言語の発音表記は付記されていない。刊行年は未詳であるが、乾隆年間に作成されたものと考えられている。

⑩ 『han i araha sunja hacin i hergen kamciha manju gisun i buleku bihe, 御製五体清文鑑』

(刊行年未詳、乾隆五十二年～五十九年頃成立説あり)

『han i araha sunja hacin i hergen kamciha manju gisun i buleku bihe, (皇帝を兼ねる)ハンが作成した五種類の文字が合致した満洲語の(辞)典(という)書』の満洲語表記に「御製五体清文鑑」の漢字表記が併記された満漢合璧の表題になっている。その表題が示すように、満洲語による見出し語彙に対してそれに適合するチベット語・モンゴル語・ウイグル語・漢語の各語彙を

対比して一行に列記した五言語の対訳辞典である。⑧を踏襲しながらウイグル語の語彙を加筆してあるほか、チベット語とウイグル語の各語彙には満洲文字による発音表記が付記されている。また⑧と同じく刊行年は未詳であるが、乾隆年間に作成されたものと考えられている。

以上、①から⑩までを列記したが、ここで特に留意すべきは、これら一連の『清文鑑』を編纂し刊行した変遷の過程が、清朝による五族（満洲・モンゴル・漢・チベット・ウイグル）併合を伴う版図拡大の過程と符合していることである。そのことは御製による①・②・④・⑥・⑦・⑨・⑩の変遷から顕著に見てとることができる。その大略をまとめると、康熙年間の①・②と乾隆年間としては最初となる④は満洲語を主体にしながらモンゴル語との対比に主眼が置かれ、乾隆年間におけるそれ以降になると満洲語を主体にすることは同じながら⑥では漢語との対比、⑦ではモンゴル語・漢語との対比、⑨ではチベット語・モンゴル語・漢語との対比、⑩ではチベット語・モンゴル語・ウイグル語・漢語の対比という変遷を遂げている。なお⑧・⑨・⑩については、乾隆年間の後半における政治状況に関わる正統性の問題を反映して御製序を付す段階までに至ることなくこと放置されたのではないかと推測される（詳細については別稿を用意）。

こうした一連の『清文鑑』のうち、⑥乾隆三十六（一七七二）年御製序『*man i araha nonggime tokiobuha manju gisun i bulaku bula*、御製增訂清文鑑』が、『壇廟祭祀節次』における「*kumuda* 司樂官」と「*kumusi* 舞生」の語彙を初めて採録しているのである。但し、満洲語の「*kumuda*」に対して「司樂」、「*kumusi*」に対して「樂舞生」の漢語彙を併記しており、それぞれ「司樂官」、「舞生」の漢語彙を併記している『壇廟祭祀節次』における対訳併記の記載方式と完全には合致していない。この点は『節次』の成立年代を検討す

るうえで重要な意味を持つと考えるため、「*kumuda* 司樂・司樂官」と「*kumusi* 樂舞生・舞生」とのことについて、他の記録ならびに辞典類における事例をもとに、今少し検討しておきたい。

四

清朝における「*kumuda* 司樂・司樂官」と「*kumusi* 樂舞生・舞生」の変遷で一大転機となっているのが乾隆七（一七四二）年である。

光緒二十五年刻本『欽定大清会典事例』卷十九「礼部」「官制・礼部」に、（乾隆）七年、設樂部。以礼部滿洲尚書・内務府總管大臣、暨各部院尚書侍郎知樂者總理。所屬和声署署正、滿漢各一人。署丞、滿漢各一人。供用供奉無定員。均以礼部・内務府・太常寺・鴻臚寺・司官贊礼部筆帖式兼務。

と記されているように、乾隆七年に「樂部」が設置されたからである。この「樂部」とは、同じく『欽定大清会典』卷四十一に、

樂部。管理大臣（亦曰典樂、以礼部滿洲尚人兼之。又王大臣知樂者、特旨簡派、無定員。）掌考樂律樂均之度数。協之以声歌。播之以器物、而辨其祭祀朝会燕饗之用、以格幽明、以和上下。

とあるように、清朝における礼樂のことを掌り、祭祀・朝会・燕饗に際して礼樂の用に対応するための官署である。そして、先に引いた『欽定大清会典事例』卷五百二十四「樂部」「職掌・設官」によれば、

總理樂部事務、礼部滿洲尚書一人（近亦由各部侍郎兼總管内務府大臣者管理）、又王大臣特旨簡放無定員。其所屬、曰神樂署、設署正一人、左右署丞各一人、協律郎五人、司樂二十五人、樂生百八十人、舞生三百人、皆漢員。

とあり、「司楽」と「舞生」はこの新たに設けられた「楽部」の「神楽署」に所属すると記されている。その場合、同『欽定大清会典事例』卷二十一「礼部」「官制・太常寺」に、

(乾隆)二十年、改神楽所為神楽署、改提点為署正、知所為署丞。

と記されているように、これらの名称自体は乾隆二十年からのものということになるが、この神楽署に改称される以前の神楽所に「司楽」・「楽生」・「舞生」が既に所属していたか否かについては明確な記録がなく、未詳である。

ここで留意しなければならない点は、東洋文庫所蔵『壇廟祭祀節次』の冒頭に収録されている「凡諸祭祀」に「kumuda司楽官」と「kumusi舞生」の語彙はみえるものの、「kumun i jurgan 楽部」の語彙がみえないことである。そのため、「kumuda司楽官」と「kumusi舞生」の語彙がみえるということだけによって、『節次』が乾隆七年以降に作成されたと俄かには判断できないのである。

そこで、乾隆七年に至るまでの「司楽・司楽官」と「楽舞生・舞生」の記録について今少し言及しておきたい。先の『欽定大清会典事例』(卷五百二十四「楽部」「職掌・設官」)によれば、順治元年に随鑾細楽太監を設けて「巡幸」や「親詣壇廟祭祀」について取り扱われたほか、宮中における壇廟祭祀・朝会・燕饗における「楽」の用については教坊司(雍正七年に和声署に改編)ならびに太常寺神楽観に遂行させるなかで協律郎や司楽などの人数に関する改変を重ねていたが、太常寺の楽員に道士を「承充」させたことで弊害が派生した状況を背景として、乾隆七年に楽部を設置し、太常寺神楽観が担当する祭祀の楽、和声署掌儀司が担当する朝会・燕饗の楽、鑾儀衛が担当する鹵簿の諸楽を全て楽部に統轄させ、礼部大臣一人と内務

府大臣一人を勅命で派遣するとともに、各部・各院の大臣で音律を習熟している者に楽部事務の全てを管轄させることにし、壇・廟における大祀の際にはこれらの総理楽部官が御史侍班処に待機し、また大朝の日にはこれらの総理楽部官が都御史侍班処に待機して、楽の演奏を監督し取り締まることにした、と記している。ただ、ここに「司楽」の記載は順治年間のことからみえるものの、「楽舞生」や「舞生」の記載はみえない。

そこで次には「楽舞生」や「舞生」の記録について辿ることにしたい。先ず、中華民国になって作成された『清史稿』(卷一百一・志七十六「楽一」)によって、燕都(北京)定鼎を天に告げる順治元(一六四四)年十月の祭祀記録をみると、

於是定圜丘大祀、皇帝出宮、午門声鐘、不作樂。(中略)礼成、教坊司導迎、樂奏祐平。午門鐘作、還宮。方沢大祀、皇帝出宮、午門声鐘、不作樂。(中略)礼成、教坊司導迎、樂奏祐平。午門鐘作、還宮。析穀、皇帝出宮、午門声鐘、不作樂。燔柴迎神奏中平、奠玉帛奏肅平、進俎奏咸平、初献奏寿平、亜献奏景平、終献奏永平、撤饌奏凝平、送神奏清平、望燎奏太平。(餘与圜丘・方沢同。)太廟時享、皇帝出宮、鐘止、不作樂。致祭迎神奏開平、奠帛初献奏寿平、亜献奏嘉平、終献奏雍平、撤饌奏熙平、送神望燎奏成平。礼成、教坊司導迎奏禧平、声鐘還宮。社稷壇、皇帝出宮、声鐘、不作樂。致祭瘞毛血迎神奏宏平、奠玉帛奏初献奏寿平、亜献奏嘉平、終献奏雍平、撤饌奏熙平、送神望燎奏成平。礼成、教坊司導迎奏祐平、声鐘還宮。舞皆八佾、初献武舞、亜献・終献文舞、文・武舞生各六十四人、執干戚羽籥於樂懸之次、引舞旌節四、舞生四人司之。祭之日、初献樂作、司・樂・執旌節、引・武舞生・執干戚進、奏武功之舞。亜献・終献樂作、司・樂・執旌節、引・武舞生・執羽籥進、奏文

徳之舞。(中略) 是年、世祖至京行受宝礼、先期錦衣衛設鹵簿儀仗、旗手衛設金鼓旗幟、教坊司設大樂於行殿西前導。時龜鼎初奠、官懸備物、未遑潤色、沿明旧制雜用之、教坊司置奉鑾一人、左右韶舞各一人、協同官十有五人、俳優二十人、色長十七人、歌工九十八人。宮内宴礼、領樂官妻四人、領教坊(坊)女樂二十四人。祠祭諸樂、則太常寺神樂觀司之。以協律郎教習樂生、月三・六・九日演於凝禧殿。

とあり、「司楽」が「武舞生」や「文舞生」を引率していた記載がみえる。しかしこの記事には、万曆十五(一五八七)年序万曆版『大明会典』卷之二「吏部一」「官制一」「京官」に「礼部」の「所属衙門」として記載されている教坊司とともに、旧明朝の錦衣衛、旗手衛の記載があるほか、「沿明旧制雜用之」とも記していることから、「武舞生」や「文舞生」についても、同じく万曆版『大明会典』卷之五「吏部四」の「選官」に記されている「太常寺」に所属する「樂舞生」のことではないかと考えられる。すなわち、この順治元(一六四四)年十月の祭祀記録における礼楽に関する記載部分は、燕都(北京)定鼎に際し、明初期に制定されて明末まで施行された礼楽の制に倣って旧明の官を用いて行なったにすぎなかったのではないか。

なお、康熙十一(一六七二)年の初纂本をはじめ、乾隆四(一七三九)年改修の『大清世祖体天隆運定統建極英睿欽文顯武大德弘功至仁純孝章皇帝実録』(以下、『大清世祖実録』と略記)では、この明の旧制に関する記載部分を全く収録していない。

ところで『大清世祖実録』卷一百六にみえる順治十四(一六五七)年春正月辛亥(八日)の記事には、

辛亥。祈穀於上帝、奉太祖武皇帝配享。是日、上詣天壇、由内壇西門

入、至甬道鋪棕薦處降輦。賛引官、对引官、導至更衣幄次、更祭服、盥手畢畢、入大享東門。王以下・公以上、俱隨入。上至上帝殿立、王・貝勒・貝子・宗室・公以上、俱以次序立於階上。陪祀各官、由西門入、於階下序立畢。典儀官唱樂舞生就位。執事官各司其事。賛引官奏就位、上就拜位立。典儀官唱迎帝神、協律郎唱拊迎神樂、奏中平之章、樂作。賛引官奏陞壇、導上詣上帝香案前立。司香官捧香盒、跪案右。賛引官奏跪、上跪、奏上香。上拊柱香、上炉内。又三上塊香畢、興。賛引官導上詣太祖香案前立。上香如前儀。賛引官奏復位、上復位立。樂止。賛引官奏跪叩、伝賛同。上行三跪九叩頭礼。王以下陪祀各官、俱隨行礼。賛引官奏興、興。(中略)典儀官唱望燎、協律郎唱拊望燎樂奏太平之章、樂作。賛引官奏詣望燎位、導上詣望燎位立、祝帛焚半。賛引官奏礼畢、導上出大享東門、至更衣幄次、更衣、陞輦、回宮。王・貝勒・貝子・公等、俱隨出。陪祀各官、由兩旁門出。

とあり、皇帝が行う祈穀の祭祀において「典儀官」が唱して指示すると「樂舞生」がその定位置に着くと記されている。したがって順治年間から「樂舞生」の存在したことは想定できるが、その反面、この「典儀官」と「司楽」・「司楽官」とのことについては史料記事の制約で確認できず、問題として残ることになる。

また雍正十一(一七三三)年に完成した雍正版『大清会典』卷七十八「礼部」「祀祭清吏司・祭祀通例」をみると、康熙十二(一六七三)年のこととして、

○康熙十二年、議准。(中略)凡樂四等。有九奏。有八奏。有七奏。有六奏。(中略)舞皆八佾、用文舞生六十四人、武舞生六十四人。惟先師廟六佾、止用文舞生三十六人。其先農壇・三皇廟・真武廟・東嶽

廟・城隍廟・火神廟・関帝廟、俱教坊司鼓樂承応。惟親祭先農壇、用樂舞生。(中略)凡祭祀服色、圜丘・祈穀壇、皇帝御天青礼服。方沢、皇帝御明黄礼服。朝日、皇帝御大紅礼服。夕月、皇帝御月白礼服。其餘羣祀、皇帝皆御明黄礼服。王以下陪祀各官、皆服其本等朝衣補服。樂舞生、圜丘、用天青銷金花服。祈穀壇、同。方沢、用黑色銷金花服。朝日壇、用紅色銷金花服。夕月壇、用月白銷金花服。先師壇、用紅色補服。餘用紅色銷金花服、綠袖帶、裏金銅頂。武舞生、頂有三叉とあり、同じく卷七十九「(礼部祀祭司・郊祀一)」をみると、雍正元(一七二三)年の「圜丘」における祭祀のこととして、

○是年、題准。(中略)一、正祭日早、皇帝親詣行礼。(中略)賛引官・対引官、恭導皇帝由樞星左門、至三成黄幄次拜位前立。王・貝勒等、在三成階上排立。貝子・公等、在階下排立。分献官四員、進樞星西門、在公後立。文武各官、在樞星門外、分翼排立。典儀唱樂舞生就位。執事官各司其事。(武舞生執干戚、引進)賛引官奏就位、皇帝就拜位立。典儀唱燔柴、迎帝神、炉内燔柴。協律郎唱拳迎帝神樂、奏始平之章。樂作。賛引官奏陞壇、恭導皇帝詣第一成上帝位香案前立。(中略)從壇分献官、於皇帝陞壇時、各由東西階詣各神位前跪。上香・献帛・献爵、俱候皇帝行礼時、隨行礼。至誦祝時、亦各於神位前跪、候誦畢、三叩頭、興。賛引官奏旋位、皇帝旋位立。分献官亦退至階下立。樂止。(武舞生叩頭、退。文舞生執羽籥、引進)典儀唱行亜献礼。協律郎唱拳亜献樂、奏嘉平之章。樂作。賛引官奏陞壇、恭導皇帝詣第一成上帝位前、献爵於案上之左、如初献儀。

とある。ここから、康熙年間ならびに雍正年間の大祀・中祀に際して「樂舞生」・「武舞生」・「文舞生」が参加していたことは確認できる。しかし、

ここに引いた雍正元年の場合においても、「典儀が唱して指示すると樂舞生がその定位置に着く。執事官は各自の職務とされている祭祀事務を執り行う」とある記載部分に対して「武舞生は干戚を携え、引率されて入る」と割注が付記され、「賛引官が旋位を奏すると、皇帝は旋位して立つ。分献官が亦、退いて階下に立つと、樂は止む」とある記載部分に対して、「武舞生は叩頭して、退く。文舞生は羽籥を携え、引率されて入る」と割注が付記されているほか、その記載に続いて、「典儀が唱して亜献礼を行なえ」と指示し、協律郎が唱して亜献の樂を挙奏せよと指示すると、嘉平の章が演奏されて樂が始まる」と記載されているだけであり、「司樂」あるいは「司樂官」の具体的な記述はみえない。

以上のように、清朝の実録記事や『欽定大清会典』ならびに『欽定大清会典事例』によれば順治年間から「司樂・司樂官」と「樂舞生・舞生」が存在していたことは想定できるにもかかわらず、「司樂・司樂官」と「樂舞生・舞生」が同時に記載されている記事を見ることはできないのである。そうしたなかで、先に引いた『欽定大清会典事例』卷五百二十四「樂部」の「職掌・設官」には、乾隆七年に新設の「樂部」に属する「神樂署」に「司樂二十五人、樂生百八十人、舞生三百人を置き、全て漢員である」旨が記載されているのであり、ここからは東洋文庫所蔵『壇廟祭祀節次』の成立年代が乾隆七年以降のことであることが窺える。しかし、そのまま断定する論拠としては些か弱い点があるため、さらに満洲語の辞典類における事例によって検証しておきたい。

五

清朝で作成した二連の『清文鑑』のうち、⑥乾隆三十六(一七七二)年

御製序『han i araha nonggime toktoobuha manju gisun i buteku bithe, 御製増訂清文鑑』が、『壇廟祭祀節次』における「kumuda 司楽官」と「kumusi 舞生」の語彙を初めて採録していることは、既に言及した。ちなみに、①～⑤までは「楽」「楽人」が収録されているのみで、「楽部」に直接関連する語彙を見ることはできない。

この状態が⑥乾隆三十六（一七七二）年御製序『han i araha nonggime toktoobuha manju gisun i buteku bithe, 御製増訂清文鑑』で一変する。このことが明白に判る語彙を、その収録されている巻数に沿って示すと、巻四「hafan sindara šošohon, 設官部」一一「ambasa hafasi hacin, 臣宰類」第八に、
kumuda, 司楽 kumun i baia be dara niyalma be, kumuda sembi.
（楽の事務について掌握する者を、司楽 kumuda とする）

kumun be kadalara hafan, 典楽 kumun i baia be dara hafan be, kumun be kadalara hafan sembi.

（楽の事務について掌握する官吏を、典楽 kumun be kadalara hafan とする）
alioi hūwalyasi, 協律郎 kumun i mudan be kimcime acabure niyalma be, alioi hūwalyasi sembi.

（楽の音について詳細に調協する者を、協律郎 alioi hūwalyasi とする）
kumusi, 樂舞生 kumun deribure de kalga delhe jafafi maksire niyalma be, kumusi sembi.

（楽を始める際に干戚・籥羽を手にして舞う者を、樂舞生 kumusi とする）
とあり、巻五「dasan i šošohon, 政部」「dasan i hacin, 政類」(巻頭の目次のみ「政事類」と記載)に、

kumun, 樂 jūgan mudan ucun maksin be acabufi niyalmai gūnin bainin be hūwalyamburengge be, kumun sembi.

（声・音・歌・舞を一つにして人の意思や性格を調和させることを樂という）
とあり、巻十「niyalmai šošohon, 人部」一一「niyalmai hacin, 人類」第四に、
kumun i niyalma, 樂人 yaya filheme iyane uculeme maksime efengge be gemu kumun i niyalma sembi.

（およそ弹奏し、吹奏し、歌い、舞って興じる者については全て樂人 kumun i niyalma とする）
とある。そして巻二十「tere tomoro šošohon, 居処部」一一「jūgan yamun i hacin, 部院類」第四に、

kumun i jūgan, 樂部 yaya wecere sarilara, cūlgan tuwara, guwzali tucifi jobolo arara ele wūgan baia de deribure kumun i ucun kumun i tetun i jergi hacin be uberi kadalanme icihiyara yamun be, kumun i jūgan sembi.

（およそ祭祀ならびに宴を行なう、親閥に臨む、臨時の座亭を拵出し設けて礼に供する（などの）あらゆる慶賀の政務に際して奏する樂歌や樂器などの事項を全て管轄し処理する衙門を、樂部 kumun i jūgan とする）

とある。このように⑥『han i araha nonggime toktoobuha manju gisun i buteku bithe, 御製増訂清文鑑』では、①『han i araha manju gisun i buteku bithe, 清文鑑』と『maiju isabuha bithe, 清文彙書』に収録されている「kumun 樂」と「kumun i niyalma 樂人」とを同じ、新たに「kumuda 司楽」・「kumun be kadalara hafan 典楽」・「alioi hūwalyasi 協律郎」・「kumusi 樂舞生」・「kumun i jūgan 樂部」・「kumun i karmangga 旗手衛」の各語彙に説明を付して採録している。

このうち、乾隆七年に設置される「kumun i jūgan, 樂部」が①康熙四十七（一七〇八）年御製序『han i araha manju gisun i buteku bithe, 清文鑑』(一般にいう最初の『清文鑑』)に収録されていないのは当然のことといえる。しかし、

康熙年間から記載の見える「司楽」・「楽舞生」・「協(協)律郎」をはじめとする他の語彙についてはどのように考えればよいのであろうか。

ちなみに乾隆五十一年(一七八六)年序・嘉慶七(一八〇二)年刊行『manju gisun be niyecem isabula bitle, 清文補纂』は、『manju isabula bitle, 清文彙書』

を補完する目的で⑥『han i arala nonggime toklobuha manju gisun i buleku bitle, 御製增訂清文鑑』より後に作成されたものであるが、その巻八には、

kumuda 司楽、乃掌管樂務人。

kumusi 樂舞生、乃執干羽合樂進舞之人。又書經狄設黼屨綴衣之狄。

kumusi i da 排長。三十二年十一月閣抄。

kumusi mahatum 方山冠古樂工所著者。

kumuci 署使、乃樂部執事人。書經工以納言之工。

kumuci da 署使長、乃樂部食錢糧人戴金頂。

kumun be alia hafan 大師。樂官名見論語。

kumun i hafan 師。樂官名見四書。

kumun i ilhi hafan 少師。樂官之佐見論語。

kumun be alia amban 大司楽。

kumun i jurgan 楽部。

kumun be kadalara hafan 典楽。管理樂務官名。

kumun i karnangga 旗手衛屬變儀衛。

kumun i cjebum 樂記。

kumun i maksitu 韶舞。三十二年十一月閣抄。

kumun i faidasi 奉變。三十二年十一月閣抄。

とあり、「kumun 楽」(語彙そのものは『manju isabula bitle, 清文彙書』に収録されているために未収録)ならびに「kumun i jurgan 楽部」に深く関わる語彙を

数多く採録しており、その数は⑥『han i arala nonggime toklobuha manju gisun i buleku bitle, 御製增訂清文鑑』の場合と比べても大幅に増加している。

この場合、「kumun i niyalma 楽人」の語彙が未収録であることについては、「kumun 楽」の場合と同じく、『manju isabula bitle, 清文彙書』に収録され

ていることによると理解できると同時に、⑥『han i arala nonggime toklobuha manju gisun i buleku bitle, 御製增訂清文鑑』にみえる「airoi huryalyasi 協(協)律郎」が収録されていないことについて特に注目したい。

さらに、光緒二十三(一八九七)年付けの序を付して同年刊行された『清文総彙』の巻十一をみると、

kumun 礼楽之楽。

kumun i niyalma 楽人。吹彈唱人。

kumuda 司楽、乃掌管樂務人。

kumusi 樂舞生、乃執干羽合樂進舞之人。又書經狄設黼屨綴衣之狄。

kumusi i da 排長。三十二年十一月閣抄。

kumusi mahatum 方山冠古樂工所著者。

kumuci 署使、乃樂部執事人。書經工以納言之工。

kumuci da 署使長、乃樂部食錢糧人戴金頂。

kumun be alia hafan 太師。小樂正。見經書。

kumun i hafan 樂師。瞽侑見經書。

kumun i ilhi hafan 少師。小胥。見經書。

kumun be alia amban 大士。樂正。大師。見礼記。

kumun i taetiku 瞽宗。殷学名見礼記。

kumun i jurgan 楽部。

kumun be kadalara hafan 典楽。大胥管樂務官名。

kumun i kamangga 旗手衛屬鑾儀衛。

kumun i cjebum 樂記。見礼記。

kumun i maksin 韶舞。三十二年十一月閣抄。

kumun i faidasi 奉饗。三十二年十一月閣抄。

とある。従来、この『清文総彙』は『manju isabuha bithe, 清文彙書』と『manju gisun be niyeceme isabuha bithe, 清文補彙』をそのまま合本したものと理解されてきた。しかし、これらの収録語彙について詳細に対比してみると数多くの相違点が見える。この「kumun 楽」ならびに「kumun i jurgan 楽部」に深く関わる語彙の場合についても、『manju gisun be niyeceme isabuha bithe, 清文補彙』では、

kumun be alia hafan 大師。楽官名見論語。

kumun i hafan 樂師。楽官名見四書。

kumun i ilhi hafan 少師。楽官之佐見論語。

kumun be alia amban 大司樂。

kumun be kadalara hafan 典樂。管理樂務官名。

kumun i cjebum 樂記。

とある記述が、『清文総彙』では、

kumun be alia hafan 太師。小樂正。見経書。

kumun i hafan 樂師。瞽侑見経書。

kumun i ilhi hafan 少師。小胥。見経書。

kumun be alia amban 大士。樂正。大師。見礼記。

kumun be kadalara hafan 典樂。大胥管樂務官名。

kumun i cjebum 樂記。見礼記。

と改訂されているほか、新たに、

kumun i taekhi 瞽宗。殷学名見礼記。

の語彙を採録しているという相違が認められる。こうしたことから、『清文総彙』は『manju isabuha bithe, 清文彙書』と『manju gisun be niyeceme isabuha bithe, 清文補彙』についてさらに補訂しながら合本したものと考えられる。なお、『manju gisun be niyeceme isabuha bithe, 清文補彙』に収録されていないかった「alioi hūwalyasi 協(協) 律郎」は、『清文総彙』においてもみえない。

以上、やや冗長な検証になったが、これらの結果を踏まえ、ここで一つの仮説を提示しておきたい。

六

およそ天朝を称する中国の歴代王朝が自らその正統性を示すためには、古来の規定に則り、国家祭祀における壇廟の大祀・中祀における楽・舞の制を如何に整備するかが大きな課題の一つであった。清朝もその例外ではなく、雍正版『大清会典』巻七十八「礼部」「祀祭清吏司」「祭祀通例」に、

国家典制、祀事為重。爰自太宗文皇帝建壇立廟、大祀肇興。世祖章皇帝乘時定制、羣祀具舉。聖祖仁皇帝釐定樂章、礼文悉備。我皇上至仁大孝、尽誠尽敬、凡大小祀事、考核精詳。自京師至天下郡県、俱有祀典、其間儀文度数、詳略不同、兼綜並列、以昭一定之典則云。

とあるように、第二代のmanである太宗hong tsiuが大清皇帝として即位し直して崇徳と改元した年を大きな契機として、さらに入関を果して北京遷都を実現した世祖章皇帝ならびに中国本土の統一支配を実現した聖祖仁皇帝が、それぞれ壇廟の大祀・中祀に関する祭祀儀礼の改革を重ねている。順治年間からみえる「司楽」が古代の周王朝における「大士楽(後の太楽)」

に由来する名称、「楽舞」は『周礼』ならびに『太史公書』の「封禪書」から特記されている事項で「楽舞生」が明初期に制定されて明末まで施行された礼楽の制における「太常寺」所属の者たちであること、そして「協(協)律郎」が北魏における官吏の名称に由来することは、清朝の初期段階で壇廟の大祀・中祀に関する祭祀儀礼の改革を繰り返した理由の一つに天朝としての正統性を証明することが大きくあったことを裏書きしている。

その一方で、清朝の正統性に異議を唱える朱子学者を主体とする激しい反清思想運動が康熙年間・雍正年間・乾隆年間に激化の一端をたどる経緯のあったことから、この事態を受け、清朝は中国史上でも稀有なほど強い思想弾圧統制と称される所謂「文字の獄」によって対応することを余儀なくされた。中国本土に対するこうした厳しい思想政策の実施するなか、独裁政治を確立したとされる世宗憲皇帝の後を受けて東トルキスタンにまで領土を拡大し、中国歴代王朝として未曾有の最大版図を形成することになる高宗純皇帝は、即位の直後から国家祭祀における壇廟の大祀・中祀における楽・舞の制を重視し、その整備・改訂を繰り返すことになった。『大清高宗実録』巻一百七十における乾隆七年七月戊午朔の記事が、

又諭太常寺、(中略)夫郊廟大祀、交於神明、豈容聽樂工任意吹彈、不求音諧節正、則我君臣肅離誠敬之謂何。唐時樂工、伊涼俗樂、奏之堂上、謂之坐部伎、其不堪為坐部技者、退為立部伎又不堪、則退為雅樂部、供奉郊廟、為後世所譏笑。今俗樂之奏、猶有宮商、而雅樂荒廢如此。朕甚懼焉。白居易云、工師愚賤安足云。太常三卿爾何人。朕為爾等誦之、除既往不咎外、嗣後務須督令勤習。朕不能再為爾

等寬也。莊親王等三人、總理樂部、著加意整頓。

と伝えるように、とりわけ乾隆七年には壇廟大祀における楽・舞の改正・整備を大きく推進しようとしていたことに鑑み、楽部の設置は天朝を称する清朝の正統性を示す象徴というべき政策上の重要事項であったと考えられる。ちなみに「楽部」は、北周の「楽部(前身は「大司楽」)や唐の「楽部」に由来するものである。

とはいえ、乾隆七年における楽部の設置によって清朝における壇廟の大祀・中祀に関する祭祀儀礼の改革が完成段階に至ったとは考えにくい。完成段階にあったのであれば、その改革内容は、乾隆十五(一七五〇)年序・翌年刊行『manju isabuta bihe, 清文彙書』に反映されていなければならない。『manju isabuta bihe, 清文彙書』では全く反映されずに、⑥乾隆三十六(一七七二)年御製序『han i arha nonggime tokobuha manju gisun i bulku bihe, 御製増訂清文鑑』でようやく反映されたものの、その採録語彙は未だ一部だけに限られており、乾隆五十一(一七八六)年序・嘉慶七(一八〇二)年刊行『manju gisun be myeceme isabuta bihe, 清文補彙』で採録語彙を大幅に増加させている。この採録語彙数の変遷こそは、乾隆七年の楽部設置以降も、乾隆二十(一七五五)年における「神楽署」改称の事例にみられるように、さらなる壇廟の大祀・中祀に関する祭祀儀礼の改革が継続していたことを示すものであり、楽部設置後における過渡期としての経緯を反映するものであったと考える。

現段階で東洋文庫所蔵『壇廟祭祀節次』は、清朝の高宗純皇帝が乾隆七年以降に壇廟の大祀・中祀に関する祭祀儀礼の改革を推進した一環として、乾隆三十六年頃から乾隆五十一年頃までの間に作成されたと想定しているが、この仮説については、『壇廟祭祀節次』全体の訳注作業を踏まえた詳

細な検証作業を待つて、改めて結論付けることにしたい。

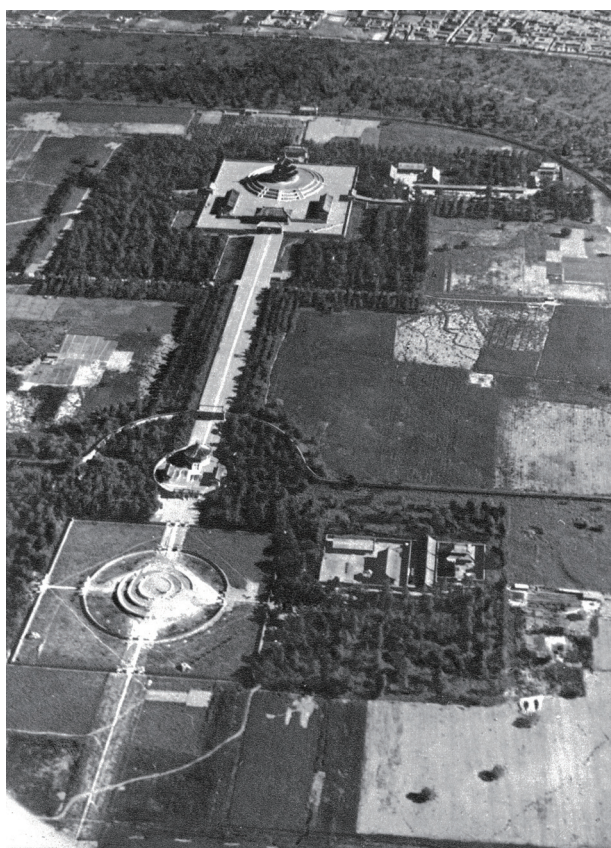


Fig. 3. 祈年殿（奥）と園丘（手前）（800メートル上空から撮影、1933年）

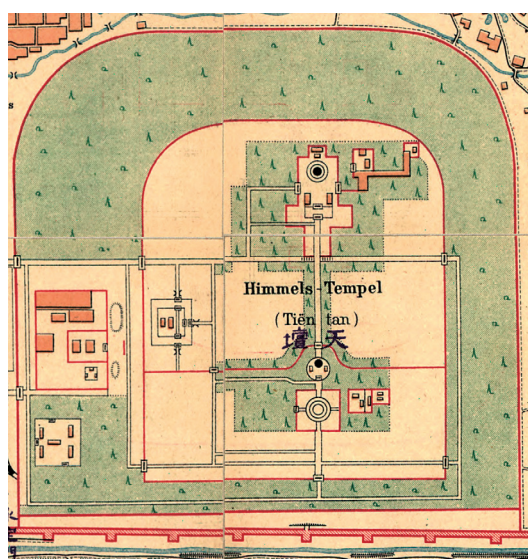
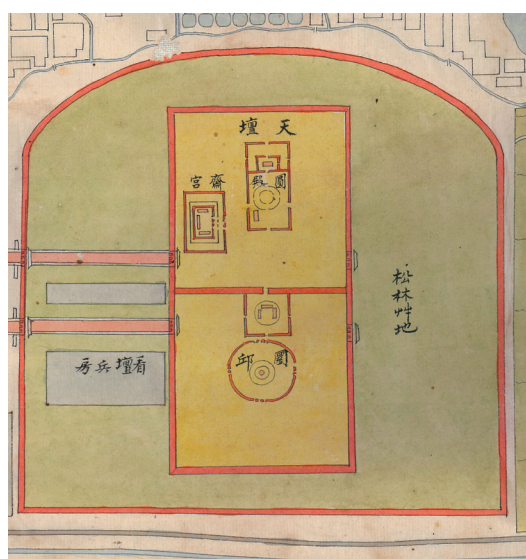


Fig. 4. 地図にみえる天壇（左：1896年／右：1903年）

凡例

1. 原文の揭示には、史料の画像を掲げた（郭内のみとし、内容で分けた）。
2. 原文で色がついている文字は、語注・和訳もそれぞれ同じ色で表した。
3. 原文画像の直下に、次の3・4・5を配した。
4. 漢文の語注
5. 満洲文のローマ字転写（*メーレンドルフ方式による）
6. 唱の歌詞とその音階（赤色）
7. 和訳は、原文画像の左隣（あるいは見開き左頁）に掲示した。
8. 満洲語部分の和訳は太字で示した。
9. 漢数字は『節次』の冊数、2ケタの数字は葉数、a/bはそれぞれオモテ／ウラ、1ケタの数字は半葉における行数を表している。
10. 「」は訳注者による補足、||は原文における擡頭箇所を示す。

* P. G. von Möllendorff, *A Manchu Grammar With Analyzed Texts* (Shanghai: American Presbyterian Mission Press, 1892). に示されている。

凡祭祀東西領文生武生班之人所執之節

Fig. 8. 文舞生・武舞生を率いる司案官が持つ「節」
（『節次』西12b）

Fig. 9. 案設とともに祭壇に置かれた「節」（1914年の祭天典禮にて）

6

いつも思うは横え付けと取極のふえることゝあゝ
これなるは臣民の食のこと
用いるは「八政」あゝ
食うことは何よりも先なるゝ
雨天・晴天は頃合としてゝあゝ
女儀の調和は君主の徳にて完全無欠なり
五穀は我と大勢の民とゝあゝ
ついでには五穀豊饒の年に
仰ぐは天・地・人の三道にて公平なりゝあゝ
はつきりと現れるは政のつしなり
掛け持つのは、端にて掛けるのは、幣帛（はうひく）は、
おそれわなくはあかも遠慮を足しらすうゝ

9

7

典儀官が
「玉帛を捧えまつれ」と唱す。
樂奏は「節次」に
唱奏官が
「慶玉帛礼の終平之章を始めよ」と唱す。

8

樂奏終平之章
念茲稼穡兮惟民天
雨暘時若兮玉燭全
仰三無私兮昭事虔
農用八政兮食為先
粒我蒸民兮迄用康年
奉璋承帛兮懷若臨淵

2

4

5

3

八政：食・衣・祀・司空・司徒・司寇・貢・師・璋主製の物

xxiii

01a

凡諸祭祀未祭之先各執事人員等俱預往祭所敬謹預備司樂官二員各戴朝帽穿朝服補褂皂靴帶數珠執節預引武舞生等就位左右立肅恭祇候安供

神位畢

屆期次第作樂至初獻樂奏武

01b

舞生等起舞初獻樂至第二句畢樂止武舞生等跪即讀祝文讀祝畢武舞生等興即接作第三句樂武舞生等復起舞初獻樂止司樂官引武舞生等退又

02a

司樂官二員各戴朝帽穿朝服補褂皂靴帶數珠執節引文舞生等上就位左右立然後亞獻樂奏文舞生等起舞至終獻畢司樂官引文舞生等退惟

先師

孔子廟之祭武舞生等不用未

02b

先簋

壇文武舞生皆無則毋庸致議

「凡諸祭祀」(本書p.2~p.5)

13. 記載内容が同一の、漢文を見開き頁の右上に、同じく満文を左上に掲げた。
14. 漢文の原文の下には、満洲語から翻訳した日本語訳を掲げた。

本訳注では、冒頭4葉(01~04)の「凡諸祭祀」に限り、右のようにした。

13. については、以下にやや詳しく説明しておく。「凡諸祭祀」(二01~04)は、『節次』の冒頭に位置し、『節次』全体にかかわる祭祀について述べている箇所、全4葉に及ぶ。このページと次のページの上段には、第1葉から第4葉までを右から左へと順に原文画像を掲げた。

一見して分かるように、右から2番目まで(すなわち01a~02bまでの2葉)は、漢文が記載されており、つづく3番目から4番目(すなわち03a~04bまでの2葉)には、満洲文が記載されている。

漢文と満洲文が並記され、両者が同一の意味内容の記載方式を「満漢合璧」という。「凡諸祭祀」は、まさにこの「満漢合璧」で記されている。

なお、満洲文は、左から右へと文章が続く記載方式である。つまり、満洲文は、04b(第4葉ウラ6行目)が文章の冒頭で、右へと文章が続き、03a1(第3葉オモテ1行目)が文章すべての終わりである。漢文とは、文章が続く方向がまったく逆なのである。「凡諸祭祀」の擡頭部分(凸)に注目してみると、ほぼ左右対称となっていることが分かるだろう。

これは「凡諸祭祀」が、漢文と満洲文がそれぞれちょうど2葉ずつ、4葉にピッタリ収まって(収まるように調整して)おり、かつ、同じ意味内容を記しているから、漢文と満洲文とで擡頭の位置が左右対照となっているのである。

なお、14. のように、満洲語から翻訳した日本語を漢文の原文の下に配したのは、漢文と満洲文とにみられる記載上の微妙な差異を明示する試みでもある。「満漢合璧」形式の訳注のスタイルとしても、新たな挑戦をしている。この点については、読者のみなさんにご理解、ご意見をいただきたい。

o4b

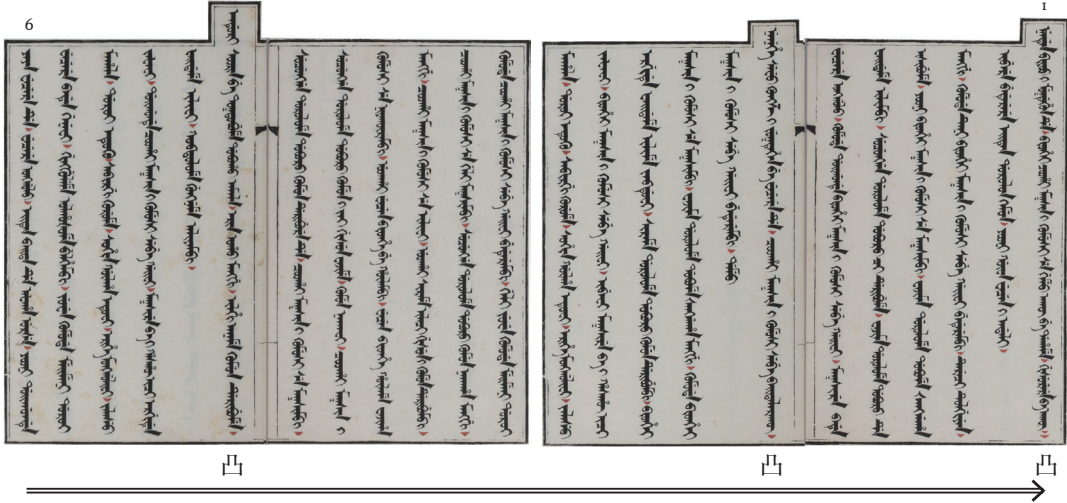
o4a

o3b

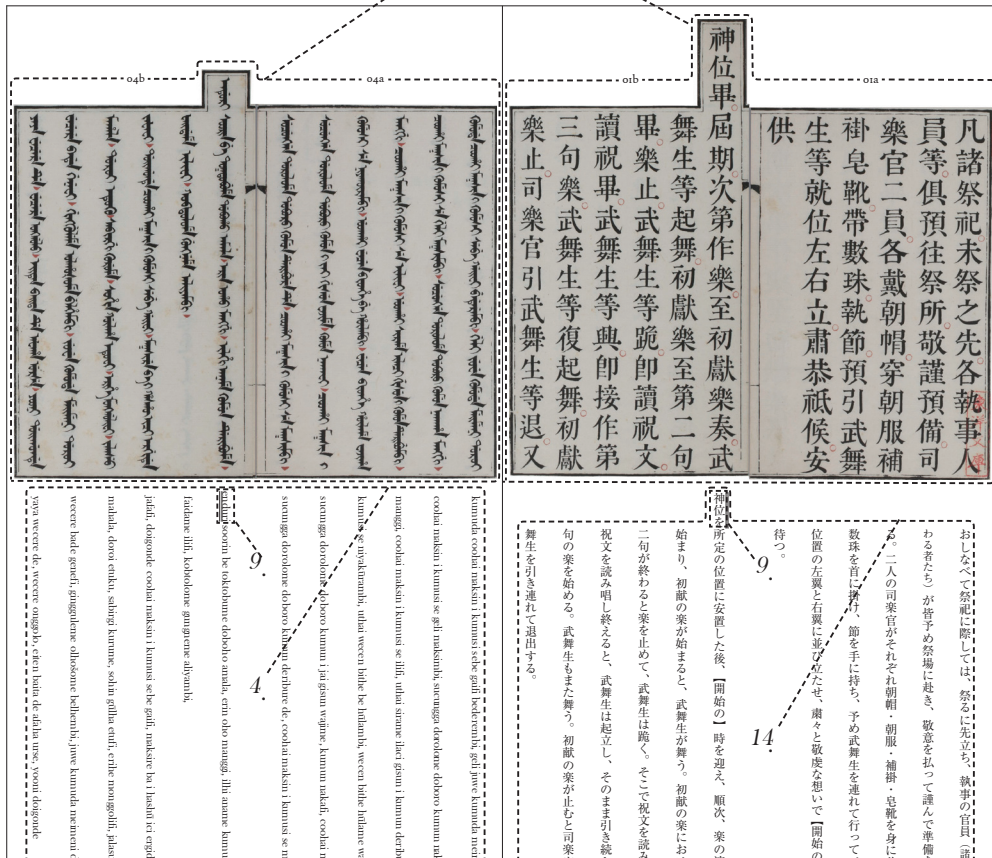
o3a

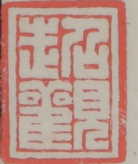
1

6

凡
例

13





凡諸祭祀未祭之先各執事員等俱預往祭所敬謹預備樂官二員各戴朝帽穿朝服掛皂靴帶數珠執節預引武生等就位左右立肅恭祇候供

凡
諸
祭
祀

凡諸祭祀。未祭之先。各執事人員等。俱預往祭所。敬謹預備。司樂官二員。各戴朝帽。穿朝服。補褂。皂靴。帶數珠。執節。預引武舞生等。就位。左右立。肅恭祇候。安供。

神位畢

屆期。次第作樂。至初獻樂奏。武舞生等起舞。初獻樂至第二句畢。樂止。武舞生等跪。卽讀祝文。讀祝畢。武舞生等興。卽接作第三句樂。武舞生等復起舞。初獻樂止。司樂官引武舞生等退。又

おしなべて祭祀に際しては、祭るに先立ち、執事の官員（諸事に携わる者たち）が皆予め祭場に赴き、敬意を払って謹んで準備を整える。二人の司樂官がそれぞれ朝帽・朝服・補褂・皂靴を身に着け、数珠を首に掛け、節を手に持ち、予め武舞生を連れて行つて、舞う位置の左翼と右翼に並び立たせ、肅々と敬虔な想いで【開始の時を】待つ。

神位を所定の位置に安置した後、【開始の】時を迎え、順次、樂の演奏が

始まり、初獻の樂が始まると、武舞生が舞う。初獻の樂における第二句が終わると樂を止めて、武舞生は跪く。そこで祝文を読み唱す。祝文を読み唱し終えと、武舞生は起立し、そのまま引き続き第三句の樂を始める。武舞生もまた舞う。初獻の樂が止むと司樂官は武舞生を引き連れて退出する。

ॐ नमो भगवते वासुदेवाय ॥ १ ॥
 ॐ नमो भगवते वासुदेवाय ॥ २ ॥
 ॐ नमो भगवते वासुदेवाय ॥ ३ ॥
 ॐ नमो भगवते वासुदेवाय ॥ ४ ॥
 ॐ नमो भगवते वासुदेवाय ॥ ५ ॥
 ॐ नमो भगवते वासुदेवाय ॥ ६ ॥
 ॐ नमो भगवते वासुदेवाय ॥ ७ ॥
 ॐ नमो भगवते वासुदेवाय ॥ ८ ॥
 ॐ नमो भगवते वासुदेवाय ॥ ९ ॥
 ॐ नमो भगवते वासुदेवाय ॥ १० ॥

[illegible]

02a

先師孔子廟之祭。武舞生等不用。未
司樂官二員各戴朝帽。穿朝服
補褂皂靴。帶數珠。執節。引文舞
生等上就位。左右立。然後亞獻
樂奏。文舞生等起舞。至終獻畢。
司樂官引文舞生等退。惟

02b

先蠶壇文武舞生皆無。則毋庸致議。
祭之先。司樂官預引文舞生等
就位立。初獻至終獻。皆係文舞
生等舞。終獻畢。然後司樂官引
文舞生等退。其餘進退諸儀節。
皆與他祭同至。

再び二人の司樂官がそれぞれ朝帽・朝服・補褂・皂靴を身に着け、数珠を首に掛け、節を手に持ち、文舞生を引き連れて進み、舞う位置の左翼と右翼に並び立たせると、亜献の楽が始まる。文舞生が舞う。【初献の場合と同様に進み】終献【の楽】を奏樂し終えると、司樂官は文舞生を引き連れて退出する。ただし、

先師孔子廟を祭る際には武舞生を用いない。

祭るに先立ち、司樂官が予め文舞生を連れて行つて、舞う位置に並び立たせる。初献から開始し、終献に至るまで、凡て文舞生が舞う。終献【の楽】を奏樂し終えると、司樂官はそこで文舞生を引き連れて退出する。それ以外の進み入るあるいは退出する一切の儀節は皆、他の祭祀と同じである。

先蠶壇では文・武舞生が全ていないので、議することはない。

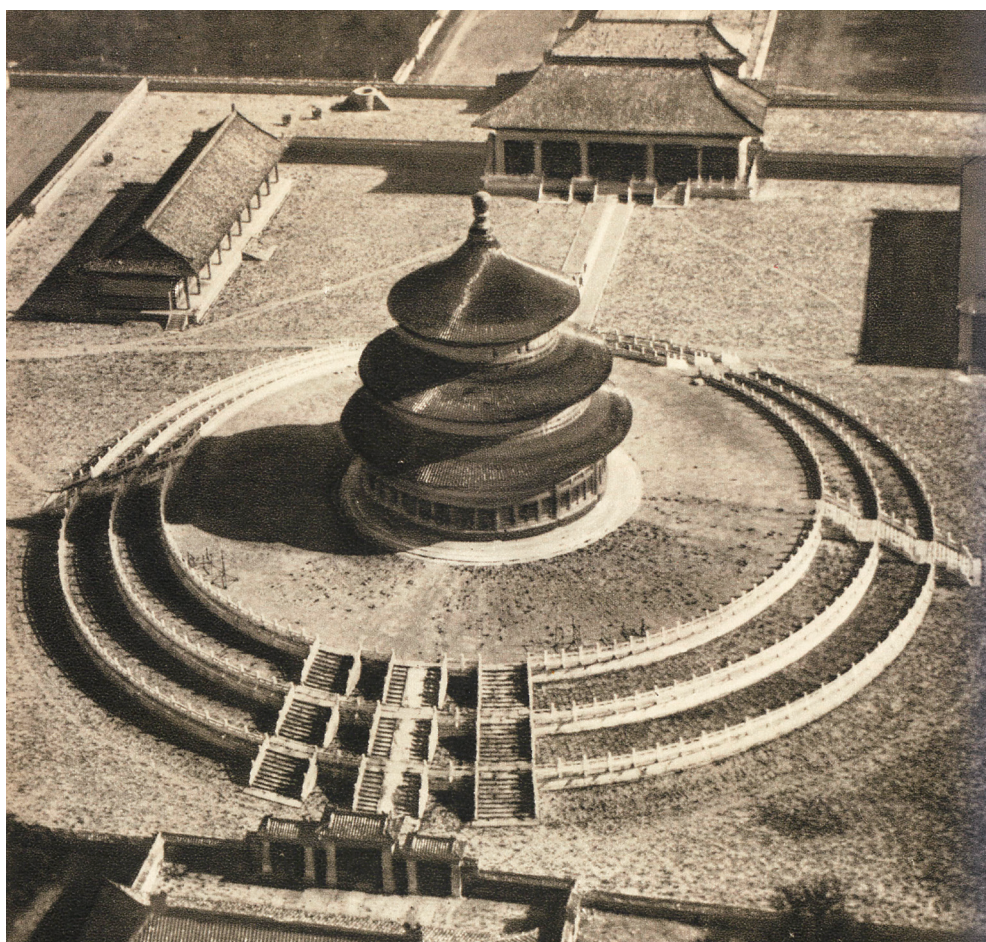


Fig. 6. 100メートル上空からみた祈年殿（一九三三年撮影）

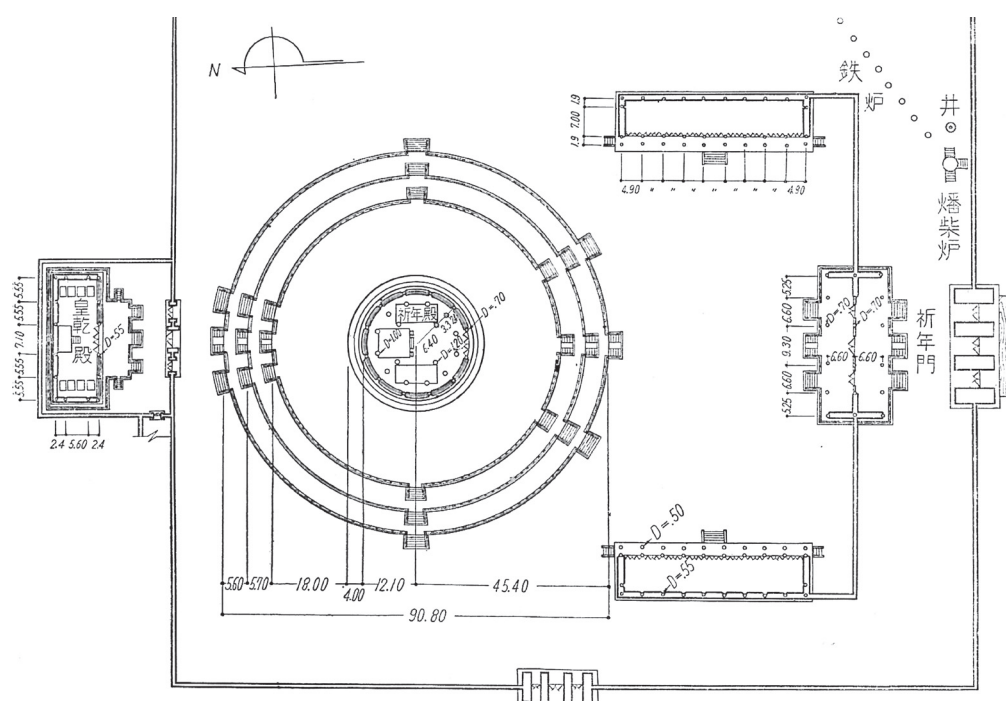


Fig. 7. 祈年殿の平面測量図

一
祈
穀
壇

祈穀壇

正月上辛日祭 或二辛日祭 致齋三日
日出前七刻祭

樂章黃鐘宮

倍夷則起

簫譜 各章皆係頭一字末一字用上字皆係尺四
笛譜 各章皆係頭一字末一字用凡字皆係合尺

迎神禮

迎神禮

迎神禮

迎神禮

樂奏祈平之章

樂奏祈平之章

帝篤祐民兮求莫匪舒
小民何依兮飲食惟需

莫嘉於穀兮萬事權輿
爲民請命兮豈非在予

日用辛兮百辟趨
瞰將出兮東風徐

惟予小子兮敬盥顙乎
皇皇龍駕兮穆將愉

皇皇龍駕兮穆將愉

正月：旧曆1月。 致齋：祭祀を行うに先立ち内寝において心身を清浄に保つこと。
七刻：14.4分×7=100.8分。

樂章：樂奏に合わせて歌詞を唄う樂歌。 黃鐘：音律の名称。[†]六律・六呂からなる十二律の一つで、その基本となる音。 宮^{†1}

倍：十二律の倍律。六律の蕤賓・夷則・無射ならびに六呂の林鐘・南呂・応鐘の倍律を用いて樂声に入れること。 夷則：音律の名称。十二律の一つで、基本となる黃鐘から九番目の律。 調^{†2}

譜：樂器を奏する際の曲節を記した樂譜。

迎神禮：神をお迎えたもう儀礼。

^{†1}宮：宮(土)・商(金)・角(木)・徵(火)・羽(水)からなる五音(五声)の一つで、中央「土」の音聲。律は黃鐘に該当する。

^{†2}調：音律を合わせて樂を奏する。

祈平之章：「祈りたもう太平」という調子の樂。

kumun hulara hafan

enduri be okdoro doroi jalbare taihin mudan i kumun deribu sene hulanbi,

帝篤祐民兮求莫匪舒
小民何依兮飲食惟需

莫嘉於穀兮萬事權輿
爲民請命兮豈非在予

日用辛兮百辟趨
瞰將出兮東風徐

惟予小子兮敬盥顙乎
皇皇龍駕兮穆將愉

[†]十二律は、1オクターブ内の12の音のこと。黃鐘を基準音とし、低い音から順に、黃鐘・大呂・夾鐘・姑洗・仲呂・蕤賓・林鐘・夷則・南呂・無射・應鐘。十二律のうち六律は、順番が奇数(陽)、六呂は偶数(陰)のものをいう。

【訳文】

祈穀壇

* 正月最初の辛の日に行う祭、もしくは二番目の辛の日に行う祭。

* 致斎は三日間。太陽が昇る時刻より*七刻前から始める祭。

* 楽章*黄鐘

「楽章」は「黄鐘」の音律、「五音」の宮(土)の音声で行う。

* 倍*夷則

夷則の倍律を用いて楽声に入れ、音律を合わせて樂を奏する。

簫*譜

【祈穀壇の祭祀において簫譜を】樂奏するそれぞれの章では、全て、

冒頭の一字と末尾の一字に「上」字の音符を用い、「尺」と「四」の二字の音符は除いて使用しない。この本楽章では全体に亘って、ただ「簫譜」だけを記載している。

笛*譜

【祈穀壇の祭祀において笛譜を】樂奏するそれぞれの章では、全て冒

頭の一字と末尾の一字に「凡」字の音符を用い、「合」と「尺」の二字の音符は除いて使用しない。

* 迎神礼

典儀官が

「神をお迎えたまえ」と唱す。

樂奏「*祈平之章」

唱樂官が

「迎神礼の祈平之章を始めよ」と唱す。

上帝さまは厚い幸いを民にゝああゝ

お求めなさるは過ちの延び広がらんことをゝ

臣民らはいずこに恃むかゝああゝ

飲み食らうをただ待つばかりゝ

めでたいとばかりは思ふまいぞ五穀にゝああゝ

何事も全ては芽生えようゝ

民というものは命を請いゝああゝ

どうして予にはあらざらんやゝ

日々悲しみを聞き入れてゝああゝ

幾多の罪が次々に起こるゝ

朝日がまさに昇らんとしてゝああゝ

東風こちが流れる穏やかにゝ

これなる予は天子なりてゝああゝ

敬いてそそぐは大いなる誠ゝ

きらびやかなる竜に乗りてゝああゝ

麗しくも心はまさに和らがんとすゝ

奠玉帛禮

樂奏綏平之章

三

念茲稼穡兮惟民天
雨暘時若兮玉燭全
仰三無私兮昭事虔
農用八政兮食爲先
粒我蒸民兮迄用康年
奉璋承帛兮懌若臨淵

農用上乙上合工凡
用八政兮食爲先
粒我蒸民兮迄用康年
奉上合乙上凡
奉璋承帛兮懌若臨淵

【訳文】

* 奠玉帛礼

典儀官が

「玉帛を供えまつれ」と唱す。

樂奏「^{*}綏平之章」

音楽官が

「^{*}奠玉帛礼の綏平之章を始めよ」と唱す。

奠玉帛礼：玉帛を供えまつる儀礼。

dorolobure hafan

gu suje dobo seme hūlambi,

綏平之章……穀物が生育した太平」という調子の楽。

kumun hūlara hafan

gu sije doboro doro i fullureke taim mudan i kuman deribu sene hūlambi,

念茲稼穡兮惟民天
農用*八政兮食爲先

農用上
八政乙
上合
兮工
食工
爲工
先凡

雨暘時若兮玉燭全

粒我蒸民兮迄用康年

仰三無私兮昭事虔

奉^工璋^上承^{*}帛^合兮^合慄^乙若^工臨^凡淵^工

八政：食・貨・祀・司空・司徒・司寇・賓・師。

璋：玉製の笏。



Fig. 8. 文舞生・武舞生を率いる司楽官が持つ“節”
（『節次』四 12b）

いつも思うは植え付けと収穫のふえることゝああゝ
 これなるは臣民の食のことゝ
 用いるは「*八政」ゝああゝ
 食らうことは何よりも先んじるゝ
 雨天・晴天は頃合いとしてゝああゝ
 気候の調和は君主の徳にて完全無欠なりゝ
 五穀は我と大勢の民とゝああゝ
 ついには以て五穀豊穡の年にゝ
 仰ぐは天・地・人の三道にて公平なりゝああゝ
 はつきりと現れるは政のつつしみゝ
 まつりこと
 捧げ持つのは、璋にて捧げるのは幣帛【ぬさ。神にささげる絹】ゝああゝ
 おそれわななくのはあたかも深淵を見下ろすようゝ

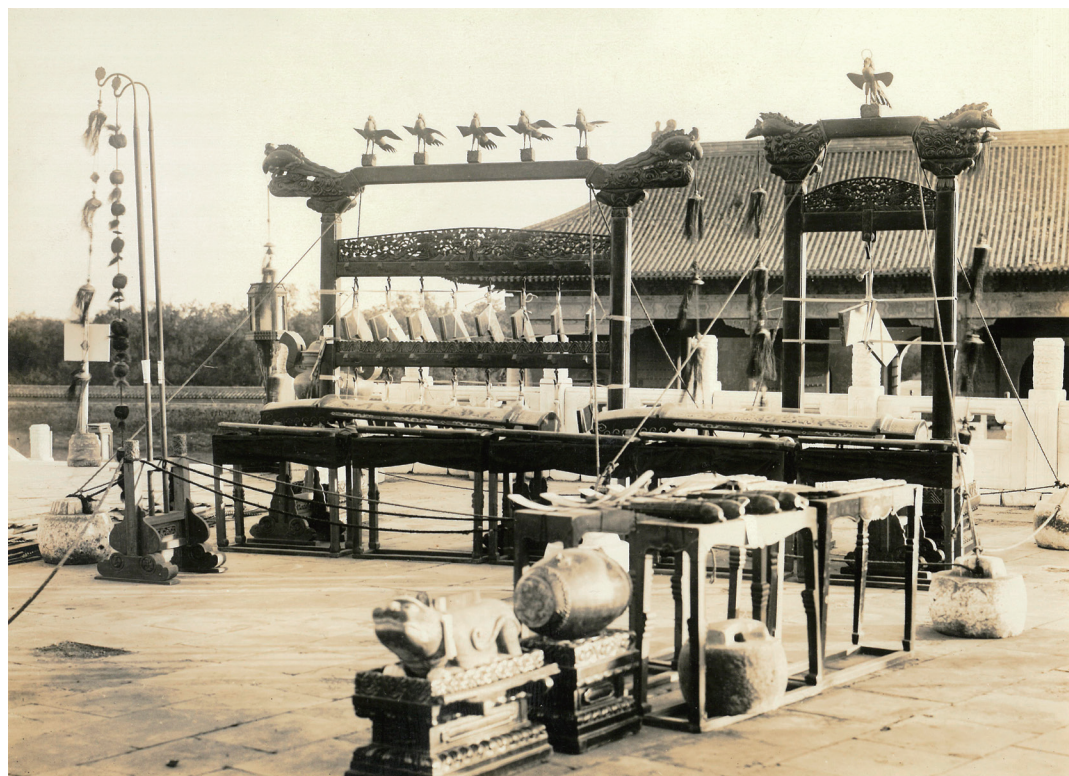
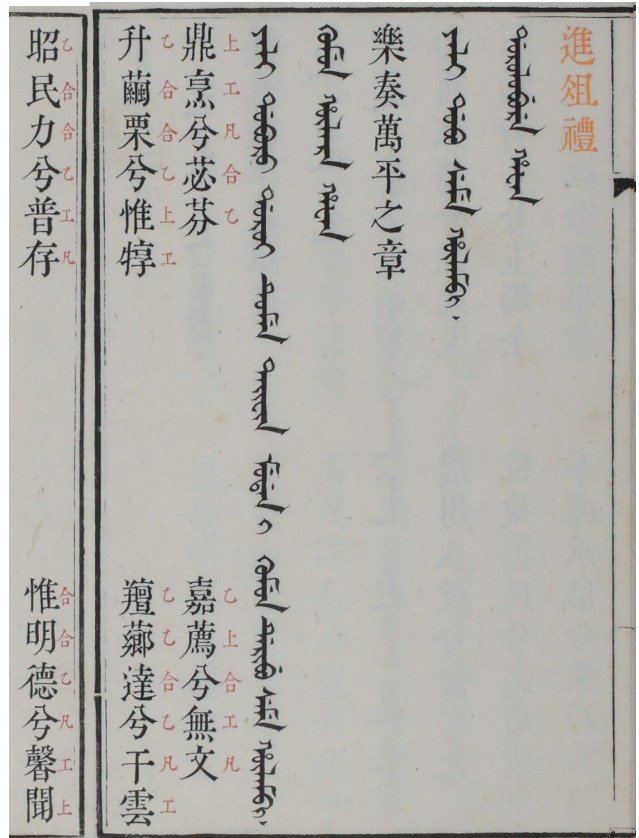


Fig. 9. 楽器とともに祭壇に置かれた“節”（1914年の祭天典礼にて）

o7a
I

o6b



進俎礼…まないた俎に載せた肉を供えまつる儀礼。

dorolobure hafan

yai dobo sene hūlambī,

万平之章…「きわめて太平」という調子の樂。

kumun hūlara hafan

yai doboro doroi tumen tūfūn mūdān i kumun derību sene hūlambī,

鼎烹兮苾芬
嘉薦兮無文

升繭栗兮惟惇
羶薌達兮于雲

昭民力兮普存
惟明德兮馨聞

【訳文】

*進俎礼

典儀官が

「俎に載せた」肉を供えまつれ」と唱す。

樂奏「万平之章」

唱樂官が

「進俎礼の万平之章を始めよ」と唱す。
かなえ
鼎はぐつぐつと煮えあ



Fig. 10. “俎”（祭祀のときにいけにえを載せるもの）

香り立ちて香ばしく
 みごとなるお供物にはああ
 文飾がない
 たてまつる生まれたての子牛はああ
 これなるは黄色い体に黒い脰
 生肉の香りが届きわたるああ
 空高くまで
 はつきりと現れるは民の労力ああ
 普く充分に行き届くあまね
 これなるはりっぱな徳性ああ
 大いなる誉れ

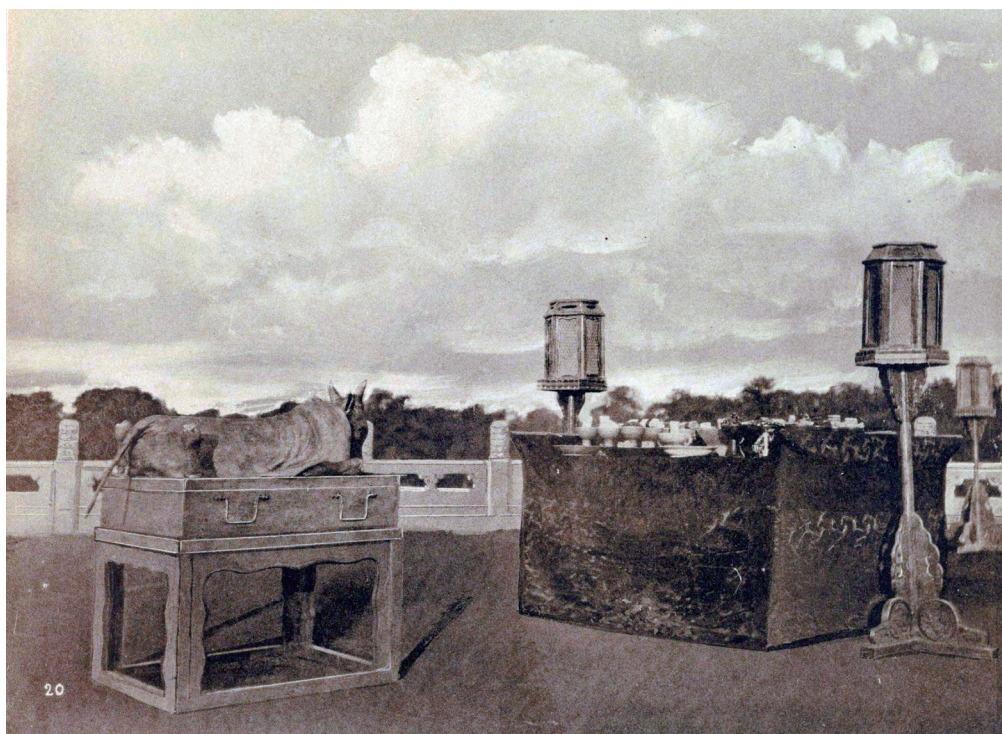


Fig. 11. “俎”にのせられた牛（1914年の祭天典礼にて）

初獻禮

विष्णुसहस्रनाम

1. *Handwritten text in a cursive script, likely a signature or name.*

樂奏寶平之章

三

[illegible]

初獻上工凡合乙今元酒盈

致純潔兮儲精誠

瑟黃流兮壘承

儼對越兮維清

帝心歆假兮綏我思成

罍：酒樽。

dorobure hanan
初献礼…初献の儀礼。初献は、祭祀儀礼で初めて酒を献ずることで、一番目の爵を奠る儀礼の行為。

dorolobure hafan

sucungga dōrolome dobo seme hūlambi,

宝平之章……「宝玉の太平」という調子の楽。

kumun hūlara hafan

sucungga doroŋe doboro doro i boobai tafiŋ mudan i kumun deribu sene hiŋambi,

初獻上工凡合乙兮元酒盈
致純潔上合乙合合上乙兮儲精誠

瑟黃流兮凡工凡工凡工凡 疊承凡工凡
酌其中兮乙合乙合乙合乙 外清明上乙

儼對越兮維清
帝心歆假兮綏我思成

罍：酒樽。

【訳文】

*
初献礼

典儀官が

「初献の儀礼を行ない供えまつれ」と唱す。

樂奏「^{*}宝平之章」

唱樂官が

「初献礼の宝平之章を始めよ」と唱す。

初献としてお供えいたしまするはくああく



Fig. 12a. 武舞生の冬用（右）と夏用（左）の帽子（『節次』四 01a）

この上なき美酒を満ちそそぎます
お届けいたしまするは穢れなき清き心ゝああ
たくわえたもうた混じりけのないまごころ
おごそかに天の五穀は流れゝああ
*疊【酒樽】にうけいだきたもう
酌みつぎたまえばゝその中からゝああ
たちまち外は清らかに澄み渡るゝ
莊嚴に天地神明に答えたもうゝああ
つながりたもうは清らかなりてゝ
上帝さまの御心がお供え物を受けていただくことになればゝああ
安んずることができまするゝわが願いがおそなえできたもうたとゝ



Fig. 12c. 武舞生の上衣（『節次』四 04a）



Fig. 12b. 武舞生の持ち物（威/干、『節次』四 13a）

武生舞譜

第一句 初正躬身獻正揚舞兮正垂舞元裏擺手

酒對擺脾盈一朝上

第二句 致對別足純對揚舞潔對一揖兮正揚舞

儲正別足精正揚舞誠背一召

第三句 瑟正揚舞黃一對面流外擺手兮對躬身

疊正垂舞承正開斧

第四句 酌正拱手其對面低擺脾中再擺脾兮裏看尖

外背擺脾清正一揖明正平身

第五句 儼正躬身對一對面越對垂舞兮正揚舞

維對擺脾清正平身

第六句 帝正拱手心正沉脾歛正垂舞假背一揖

兮正開斧綏正拱手我單膝跪思雙膝跪

成一叩首

武生舞譜…「初獻礼」の「宝平之章」に合わせて舞う。

揖…胸の前に組み合わせた両手を前に出し、上下させて行う礼。

召…曲げてそる動作。

裏看尖…尖頭よりも身体を低く屈める動作。

正平身…立ち上がって身体をまっすぐにする。

沉…「沈」と同じで、かくれる。

双膝跪…この名称の「舞譜」の型は、『節次』五「文生武生舞譜」所収の「武生舞譜」にはみえない。この「双膝跪」の一つ前が「単膝跪」で、一つ後が「一叩首」となっている。

「武生舞譜」(「文生武生舞譜」所収)では「単膝跪」(五13a下)と「一叩首」(五13b下)との間に「一長跪」(五13b上)がある(19頁参照)。両膝とも跪くそのポーズはここでの流れにも適合していることから、19頁では「一長跪」の型を掲げた。詳細は「研究篇」に委ねたい。

【舞譜】

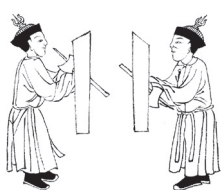
*武生舞譜

初 第一句



正躬身

致 第二句



対別足

瑟 第三句



正揚舞

献



正揚舞

純



対揚舞

黄



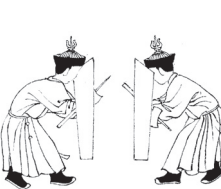
一对面

兮



正垂舞

潔



对一揖*

流



外擺手

元



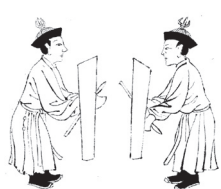
裏擺手

兮



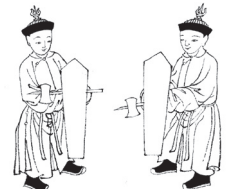
正揚舞

兮



对躬身

酒



対擺牌

儲



正別足

罍



正垂舞

盈



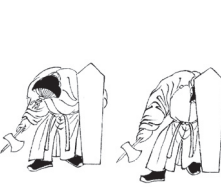
一朝上

精



正揚舞

承



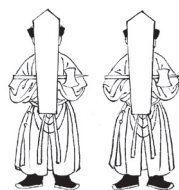
正開斧

誠



背一召*

酌
第四句



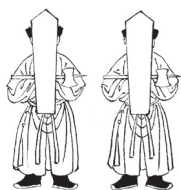
正拱手

儼
第五句



正躬身

帝
第六句



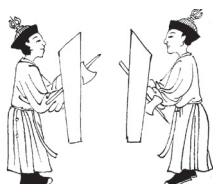
正拱手

其



對面低擺牌

對



一對面

心



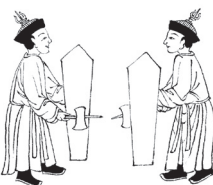
正沉牌*

中



再擺牌

越



對垂舞

歆



正垂舞

兮



裏看尖*

兮



正揚舞

佂



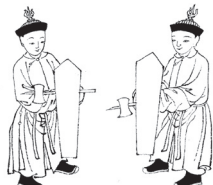
背一揖

外



背擺牌

維



對擺牌

兮



正開斧

清



正一揖

清



對平身

兮



正平身*

明

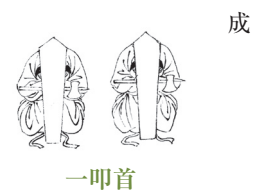
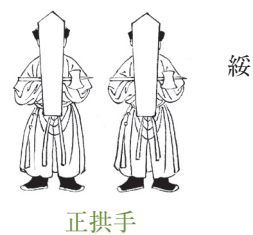


正平身*



上：Fig. 13a. 武舞生の“一朝上”と“単膝跪”（『節次』五 13a)

下：Fig. 13b. 武舞生の“一長跪”と“一叩首”（『節次』五 13b)



o8b

oga
1

亞獻禮

樂奏穰平之章

儀尊啓兮告虔

禮再獻兮祠筵

神悅懌兮優然

清酏既馨兮陳前

光煜燐兮非烟

惠我嘉生兮大有年

神悅懌兮優然

惠我嘉生兮大有年

【訳文】

* 亞獻礼

典儀官が

「亞獻の儀礼を行ない供えまつれ」と唱す。

楽奏「* 穰平之章」

唱樂官が

「亞獻礼の穰平之章を始めよ」と唱す。

儀礼に用いる牛形の酒樽をひらきああ

亞獻礼…亞獻の儀礼。「亞獻」は、祭祀儀礼で二番目に酒を献すること、

二番目の爵を奠る儀礼の行為。

dorolobure hafan

sirame dorolome dobo seme hūlambi,

穰平之章…「豊かな太平」という調子の楽。

kunmū hūlara hafan

sirame dorolome doboro doroi elgyen tairin mudan i kunmū deribu seme hūlambi,

儀尊啓兮告虔

清酏既馨兮陳前

禮再獻兮祠筵

光煜燐兮非烟

神悅懌兮優然

惠我嘉生兮大有年

酏…ひとよけ。

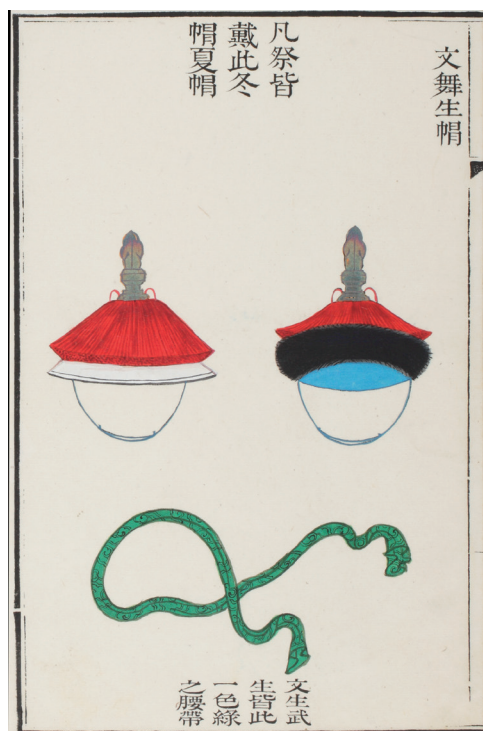


Fig. 14a. 文舞生の帽子(夏／冬)と舞生の帯(『節次』四 01b)

申し上げますゝつつしみてゝ
けがれなき*酤は既にしてかんばしくゝああゝ
ならべ供えまつります御前にゝ
儀礼をかさねて行ない供えまつるゝああゝ
先祠【みやしろ】のところゝ
栄光は輝きひかりたもうゝああゝ
一点のけむるところもあらざるなりゝ
天上の神は大いに喜び楽しまれゝああゝ
ほのかにお姿がみえまするゝ
いただく幸せは我が素晴らしき穀物なりてゝああゝ
この上なく大いなる豊作の年なりゝ



Fig. 14c. 文舞生の上衣(『節次』四 04b)



Fig. 14b. 文舞生の持ち物(羽／簫、『節次』四 13b)

文生舞譜

第一句儀豎羽簫尊正垂簫啓正簫舞兮一對面

告斜豎簫虔微向裏

第二句清正躬身酤分羽簫既簫蹲身磬背羽舞

兮正橫簫陳正一揖前正平身

第三句禮懷羽簫再對雙舞獻對一揖兮對簫舞

祠正托羽筵正拱手

第四句光裏看尖煜外看尖燭簫灌耳兮背斜簫

非背羽舞烟背簫舞

第五句神正拱手悅對簫舞懌正橫簫兮背簫舞

僂正擎簫然簫托羽

第六句惠對擺羽我裏雙舞嘉外雙舞生裏看尖

兮外看尖大

別足正
橫簫

有一長跪年一叩首

文生舞譜：「垂獻札」の「穰平之章」に合わせて舞う。

簫蹲身：原文に「簫蹲身」と記載されている「舞譜」の型は、『節次』五「文

生武生舞譜」所収の「文生舞譜」にはみえない。ここでは「簫蹲身」の一つ前が「分羽簫」で、一つ後が「背羽舞」である。「文生舞譜」(五14a～49b)において「簫存身」(42b上)と記載されている「舞譜」の型が「蹲る(うずくまる)」の意と合致し、ここでの流れにも適合していることから、23頁では「簫存身」の型を示した。詳細は「研究篇」に委ねたい。

【舞譜】

文生舞譜

第一句



豎羽籥

第二句



正躬身

第三句



懷羽籥

尊



正垂籥

酤



分羽籥

再



對雙舞

啓



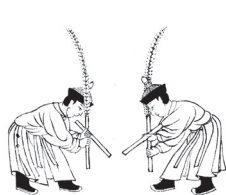
正籥舞

既



籥蹲身*

獻



對一揖

兮



一對面

馨



背羽舞

兮



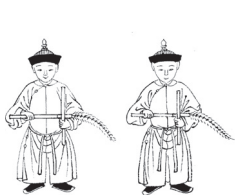
對籥舞

告



斜豎籥

兮



正橫籥

祠



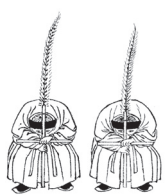
正托羽

虔



微向裏

陳



正一揖

筵



正拱手

前



正平身

光 第四句



裏看尖

神 第五句



正拱手

惠 第六句



對擺羽

煜



外看尖

悅



對簫舞

我



裏雙舞

燾



簫灌耳

懌



正橫簫

嘉



外雙舞

兮



背斜簫

兮



背簫舞

生



裏看尖

非



背羽舞

優



正擎簫

兮



外看尖

烟



背簫舞

然



簫托羽



Fig. 15. 二列に並び出番を待つ文舞生（1914年の祭天典礼にて）



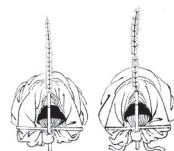
Fig. 16. 文舞生の“籥存身”（『節次』五 42b 上）



別足正横籥



一長跪



一叩首

o9b

7

終獻禮

終獻禮

樂奏瑞平之章

樂奏瑞平之章

終獻禮

終獻禮

終獻禮

終獻禮

終獻禮

終獻禮

終獻禮

終獻禮

終獻禮

終獻禮

終獻禮

終獻禮

終獻禮

終獻礼…終献の儀礼。「終献」は、「献」の儀礼として三番目にお開きの酒を献すること、三番目の爵を奠る儀礼の行為。

dorolobure hakan

wajima dorolome dobo sene hūlambī,

瑞平之章…「めでたき太平」という調子の楽。

kumun hūlara hafan

wajima dorolome doboro doroi sabingga talfin mudan i kumun deribu sene hūlambī,

終獻礼…終献の儀礼。

終獻礼…終献の儀礼。

終獻礼…終献の儀礼。

終獻礼…終献の儀礼。

終獻礼…終献の儀礼。

終獻礼…終献の儀礼。

終獻礼…終献の儀礼。

終獻礼…終献の儀礼。

終獻礼…終献の儀礼。

終獻礼…終献の儀礼。

終獻礼…終献の儀礼。

清らかでけがれなき黍をお供えいたしまするゝ

芳しく芳しく香りが溢れ立つ目出度き目出度き極上の味わいなるゝああゝ

澄み渡る甘酒が絞り仕上がつっておりまするゝ

天上の神はそれこそ喜び樂しまれてゝああゝ

神の幸いを賜われなさるゝ

祭祀を成し遂げますことが三度に及びゝああゝ

お願いの義を陳べ申し上げますゝ

願わくは常なる恩恵を賜われますようゝああゝ

万民が神の恵みをお受けできますようゝ

天の臣下なる予が*拝首致しまするはゝああゝ

赤堀【天子の座す皇宮の階上なる堀】を導く東の青堀ゝ

文生舞譜

第一句終微向外獻正拱手兮羽蹲身奉正拱手

明對一揖案正別足

第二句必高搭羽芬對擺手嘉再擺手旨正橫羽

兮肩羽簫清對擺羽醴再擺羽旣一朝上

釀正一揖

第三句神正拱手其背羽舞術外看尖兮對羽舞

錫朝上斜托羽社裏肩羽

第四句禮高搭羽成背一召於朝上交羽簫三別足高搭羽

兮對躬身陳正支羽詞正托簫

第五句願背雙舞灑正垂羽餘對面簫灌耳灑朝上平搭羽

兮外豎羽沐外雙舞羣對雙舞黎簫托羽

第六句臣正躬身拜正一揖首對一揖兮正平身

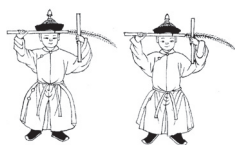
青一長跪墀一叩首

文生舞譜：「終獻礼」の「瑞平之章」に合わせて舞う。

羽蹲身：原文に「羽蹲身」と記載されている「舞譜」の型は、『節次』五「文生武生舞譜」所収の「文生舞譜」にはみえない。「羽蹲身」の前後はともに「正拱手」である。「文生舞譜」において「羽存身(五^{31a}上)」と記載されている「舞譜」の型が「蹲(うづくまる)」の意と合致し、ここでの流れに適合していることから、29頁では「羽存身」の型を示した。詳細は「研究篇」に委ねたい。



微向外



高搭羽



正拱手



對擺手



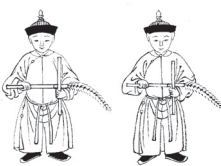
羽蹲身*



再擺手



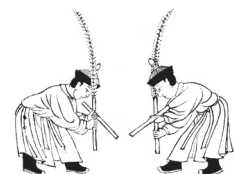
正拱手



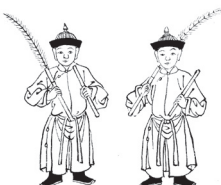
正橫羽



對擺羽



對一揖



肩羽簫



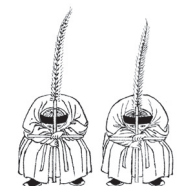
再擺羽



正別足



一朝上



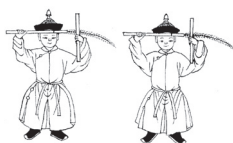
正一揖

神 第三句



正拱手

礼 第四句



高搭羽

願 第五句



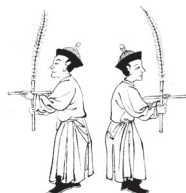
背双舞

其



背羽舞

成



背一召

灑



正垂羽

衍



外看尖

於



朝上交羽簫

餘



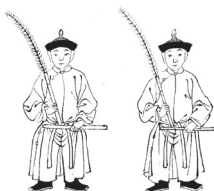
對面簫灌耳

兮



對羽舞

三



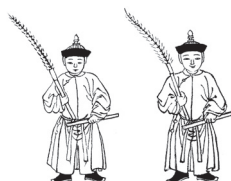
別足高搭羽

瀝



朝上平搭羽

錫



朝上斜托羽

兮



對躬身

兮



外豎羽

祉



裏肩羽

陳



正支羽

詞

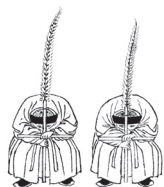


正托簫



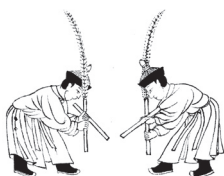
臣
第六句

正躬身



扈

正一揖



首

对一揖



兮

正平身



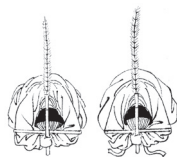
青

一長跪



沐

外双舞



墀

一叩首



群

对双舞



黎

簫托羽

よろずの品々をお供え致しております

盛大なる興りが四方に広がり光り輝きて範おしえとなりああ

天帝さまの慈しみを受けただいております

お供え物の用意は整っておりますああ

玉案【玉を飾り付けた立派な食盤の祭器】の上に

堂上に登り歌いたもうその声は満ち溢れああ

お開きに致してお供え物をお下げ致しますぐずぐず致さずに

拝し*肅しふつつかなる真心のままああ

お告げ申し上げます終極までお祭りし遂げ致しましたと

天帝さまはゆつたりと留まれてお供物を楽しまれああ

神の幸いは大いなる幸いとなりまして降りそそいでおります

送神禮

送神禮

送神禮

樂奏滋平之章

送神禮

送神禮

祇奉天威兮弗敢康

雲垂九天兮露瀼瀼

臣拜下風兮肅傍徨

小心翼翼兮昭穹蒼

翠旗羽節兮上翱翔

願沛汪澤兮民多蓋藏

【訳文】

*送神礼

典儀官が

「神をお見送りましたまゑ」と唱す。

樂奏「『滋平之章』」

唱樂官が

「送神礼の滋平之章の樂を始めよ」と唱す。

つつしみて天の御威光をお受け致し〜ああ〜

送神礼…神をお見送りましたもう儀礼。

dorolobure hafan

enduri be fude sene hūlambi,

滋平之章…「ますます広がる太平」という調子の樂。

kumun hūlara hafan

enduri be fudere doroi tumin tulin mudan i kumun deribu sene hūlambi,

祇奉天威兮弗敢康

雲垂九天兮露瀼瀼

臣拜下風兮肅傍徨

小心翼翼兮昭穹蒼

翠旗*羽節兮上翱翔

願沛汪澤兮民多蓋藏

羽節…羽で飾った節。

決して空しくすることには致しません

畏れおののかしこまるゝああ

光輝ける大いなる空に

雲は広がりましたもう天空高くゝああ

お恵みは露の如く大いに降りそそぐ

輝けるみどり色の旗は天から賜われし*羽節なりてゝああ

天帝さまは天空高く自在に飛びまわる

天の臣下なる予は拝し額ずきゝ風下の下位にゝああ

拝し肅して彷徨うばかり

願わくはゝ盛大に流れ広がりますようにゝ天のお恵みゝああ

万民が穀物の貯えを多くできますように

望燎禮

望燎禮
樂奏穀平之章

印首上凡合兮天凡間
炳蕭合束帛上合兮薦馨上香乙
四時上合順序上兮百穀上合以昌凡
混茫上合一氣上兮浩上無上方凡
精誠上合感格上兮降福上穰上穰上
臣同上合兆姓上兮咸荷上恩光上

【訳文】

*望燎礼

典儀官が

「燎【かがり火】所に詣でて燎を仰ぎ見たまえ」と唱す。

楽奏「*穀平之章」

唱楽官が

「望燎礼の穀平之章の樂を始めよ」と唱す。

跪いて頭を上げて仰ぎ願いまするはあゝ

望燎礼…燎【かがり火】所に詣でて燎を仰ぎ見たもう儀礼。

dorolobure hafan

dejiire be tuwana sene hulanbi,

穀平之章…「幸いめでたき豊かなる太平」という調子の樂。

kumun hulan hulan

dejiire be tuwana doroi bargyala taiin nudan i kumun derbu sene hulanbi,

印首上凡合兮天凡間

混茫上合一氣上兮浩上無上方凡

炳蕭合束帛上合兮薦馨上香乙

精誠上合感格上兮降福上穰上穰上

四時上合順序上兮百穀上合以昌凡

臣同上合兆姓上兮咸荷上恩光上

天がお導きくださいますことゝ

混沌のなかに雲氣が一面に立ち込めゝああゝ

豊かなること限りがございますゝ

光輝いておりますものは一束【五疋】の帛【白絹】ゝああゝ

献上致しまするゝ馨しき香りゝ

純粹な真心は感じ至っておりますゝああゝ

天より下された幸いが豊かに溢れておりますゝ

春夏秋冬は決められたとおり順次にその功を為しゝああゝ

あらゆる穀物はそのおかげで元気に豊穡に向かうゝ

天の臣下なる予もまた万民と同じくゝああゝ

あまねくこの身にお受け致しまするゝ万物を育む天の徳恩をゝ



Fig. 17. 20世紀初頭の祈年殿(南から撮影)

図版出典一覧

Fig. 3. "Himmel-Altar und Temple," In Wulf Dieter Graf zu Castell, *Chinaflug*, (Atlantis-Verlag, Berlin/Zürich, 1938) p. 69.

Fig. 4(r). "Peking," aufgenommen 1900/1901 von den Feldtopographen des Deutschen Ostasiatischen Expeditions-Korps, 1903, Boston Public Library,

Norman B. Leventhal Map Center (<https://collections.leventhalmap.org/search/commonwealth:9s161h74w>)

Fig. 4(D). 李睿智「北京全図」光緒二二（一八九六）年金台刊、東洋文庫所蔵（請求記号 VI-3-70）

Fig. 6. "Chi Nien Tien," In Wulf Dieter Graf zu Castell, *Chinaflug*, (Atlantis-Verlag, Berlin/Zürich, 1938) p. 70.

Fig. 7. 「祈年殿及びその附属建築物平面図」石橋丑雄『天壇』（山本書店、一九五七年）一五一頁

Fig. 9. 石橋丑雄氏将来天壇関係写真（石橋崇雄氏所蔵・提供）

Fig. 10. 石橋丑雄氏将来天壇関係写真（石橋崇雄氏所蔵・提供）

Fig. 11. "The Bullcalf of Unmixed Color," In John D. Zumberg, *Temple of Heaven* (John D. Zumberg, Peking, [1914]), 20.

Fig. 15. "The Flute Players and Singers," In John D. Zumberg, *Temple of Heaven* (John D. Zumberg, Peking, [1914]), 24.

Fig. 17. 「天壇内祈年殿」『清国勝景並風俗写真帖』（2）（一九〇六年以前）収録、宮内庁書陵部図書課図書寮文庫所蔵（B8・66 0002）

上記以外は、『壇廟祭祀節次』全六冊、東洋文庫所蔵（請求記号 貴E1-15-C8）より転載した。

清朝『壇廟祭祀節次』訳注(一)——凡諸祭祀・祈穀壇——

2022 年 3 月 17 日 発 行

非 売 品

編 者 石 橋 崇 雄

編 集 中 村 威 也

発 行 者 東京都文京区本駒込 2 丁目 28 番 21 号

公益財団法人 東 洋 文 庫

畔 柳 信 雄

印 刷 者 東京都千代田区神田司町 2 丁目 14 番地

富士リプロ株式会社

発 行 所 東京都文京区本駒込 2 丁目 28 番 21 号

公益財団法人 東 洋 文 庫

本書は公益財団法人東洋文庫に対する 2021 年度文部科学省補助金の一部に依って刊行されたものである。

ISBN 978-4-8097-0310-2

